

## 桂川甫賢筆長崎屋宴会図について

著者	松田 清
雑誌名	神田外語大学日本研究所 紀要
号	12
ページ	234-170
発行年	2020-03-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001662/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001662/</a>



Den 24<sup>den</sup> van Aquale omukanden plaatsen en deper Gemeenstake hies in jre - 1872.

Apparaat door  
H. J. van der Grinten



【口絵 2】葛飾北斎『画本東都遊』巻中 日本橋本石町長崎屋図 林忠正旧蔵本 帰雲蔵

## 桂川甫賢筆長崎屋宴会図について

松田 清

### はじめに

江戸時代、長崎出島のオランダ商館長一行は1633年から1850年まで217年間、将軍に拝礼するため通算166回<sup>(1)</sup>にわたって江戸参府を行った。参府のたびに必ず宿泊することになっていた日本橋の長崎屋は江戸における日蘭交流の拠点であり社交場であった。2019年2月7日、突然、オランダの Forum Rare Books 書店から、江戸長崎屋の内部を描いた水彩画を見つけたと、メールで連絡があった。

メールに添付して送られてきた撮影画像をみると、画面と画面下の余白に書き込まれたオランダ語の説明、および落款から、文政5年2月27日（西暦1822年4月18日）、長崎屋の2階広間で開かれた仮装宴会の模様を、将軍家侍医の桂川甫賢が描いたものと分かった。シーボルト来日（1823）以前の江戸における蘭学の発達、オランダ趣味の流行、そしてオランダ人の日本趣味を伝える、極めて稀少かつ重要な日欧文化交流史資料であると判断した。

たまたま、2019年5月20日から2週間の在欧資料調査<sup>(2)</sup>を計画していたため、在欧中にこの水彩画を現地で調査しようと日程調整中、4月始めに早々と現物が送られてきた。現物に基づいて改めて調査した結果、桂川甫賢自筆に間違いないと判断し、「長崎屋宴会図」と名付けた。さいわいにも、本資料はその後、神田外語大学附属図書館の収蔵となった。

書店から届いた時点では、厚紙の二つ折りフォルダーのなかに薄い保護紙をかぶせて挿入されていた。絵は縦32cm、横42.5cmの薄い和紙に岩絵の具で描かれ、上部の余白の左右に、和紙の小紙片が耳状に糊付けされていた。長期間、



大切に保存されていたようで、褪色なく鮮やかな色合いを保っていた。また、下部の余白に手書きされた蘭文のインクもそれほど酸化が進んでいなかった。そこで、現状のままマット装にして保存することになった。

この「長崎屋宴会図」は日欧文化交流史、洋学史、美術史、服飾史、建築史、食文化史など実に多方面から専門的に研究すべき重要資料であるが、第一報として本稿をまとめ、今後の研究に資することにした。

## 第1章 文政5年以前の長崎屋図

文政5年（1822）に描かれた「長崎屋宴会図」を考察するまえに、従来、長崎屋図としてほとんど唯一、一般によく知られてきた葛飾北斎画「長崎屋」図（1799）を、新出の林忠正旧蔵『画本東都遊』色摺本および新資料「神呪長寿灸」（1800）図中の商館長一行図を手がかりに、再検討したい。北斎は長崎屋に出入りした可能性も指摘される。北斎の「長崎屋」図のオランダ人画像の分析は「長崎屋宴会図」の洋装を考察するうえで役立つはずである。

また、フェイルケ筆「長崎屋の二階」図（1810）は所在不明であるが、文政5年以前に長崎屋の内部を描いたおそらく唯一の絵画であるので、写真を手がかりに分析し、「長崎屋宴会図」の考察に役立てたい。

### 第1節 北斎画「長崎屋」図

長崎屋は江戸日本橋本石町3丁目にあった時の鐘の隣に位置し、享保年間から代々薬種商を営んでいた長崎屋源右衛門（本姓江原）の別宅であった<sup>(3)</sup>。オランダ商館長一行が、毎年（寛政2年1790からは4年に1回）陽暦3月または4月に3週間ほど滞在したこの定宿は、江戸名所のひとつであり、市井の庶民が好奇の眼差しを寄せていた。

### 林忠正旧蔵『画本東都遊』

その様子を描いた葛飾北斎の長崎屋図（図1、口絵2参照）は教科書や歴史書、図録類にしばしば掲載され、よく知られている。北斎の狂歌画本『えほんあづまあそび画本東都遊』（享和2年、蔦屋重三郎刊、上中下3巻3冊）に所載の木版多色摺である。引用本は明治11年（1878）にパリ万国博覧会の通訳として渡仏し、



図1 葛飾北斎『画本東都遊』巻中 日本橋本石町長崎屋図  
林忠正旧蔵本 帰雲蔵

その後パリで美術商として活躍した林忠正（1853-1906）の旧蔵本（大判、264×175mm）である。奥付を欠くが、元表紙、元題簽（刷題簽）からなる美本。各巻頭に「林忠正印」（白文方印、26×26mm）が捺されている。元表紙の表は上中下ともに、雲英引きの薄藍色地布目に、手書きで、蒲公英の群が2段に描かれ、霞を表す棒線が横に9本引かれている（図2、図4、図5）。この棒線の一部は題簽をよぎっている。裏表紙は各巻ともに、棒線2本にわずかに雑草を書き足している（図3）。

『画本東都遊』は、狂歌師の浅草庵市人（通称伊勢屋久右衛門、1755～1820）が撰者となり、北斎（1760～1849）が挿画を描いた墨摺の狂歌絵本『東遊』（寛政11年春 [1799]、蔦屋重三郎刊、全67丁）から、狂歌および題字「萬象為新 華溪老漁篆」（3ウ）を削除し、『東遊』の挿図全29図（うち20図は見開き図）のみを色摺にして再刊した改題本である<sup>(4)</sup>。

林忠正旧蔵の改題色摺本は上述のように奥付を欠く。永田生慈監修・解説『北斎の狂歌絵本』（1988、岩崎美術社）の「作品解説」（275-278頁）が写真入りで記載する改題本（所蔵先不明）は、上中下冊、各冊全9丁からなり、下冊9丁表に「享和壬戌春日 画工北斎 筆工六蔵亭 彫刻安藤円紫」、同9丁裏に「東都書林 下谷仲町須原屋伊八 日本橋一丁目須原屋茂兵衛 本石町二丁



図2 同巻上 表紙

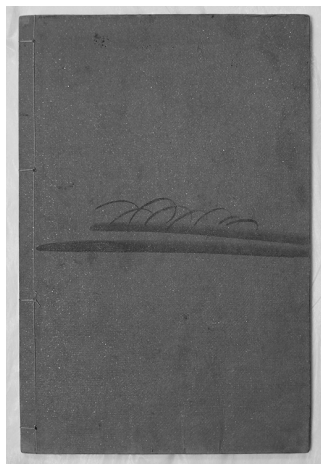


図3 同巻上 裏表紙

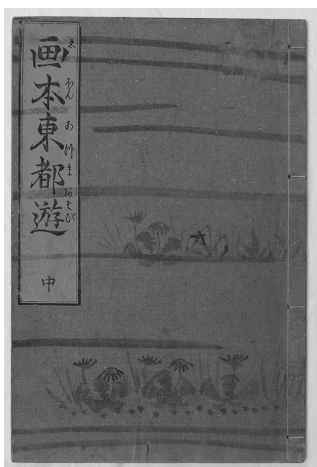


図4 同巻中 表紙

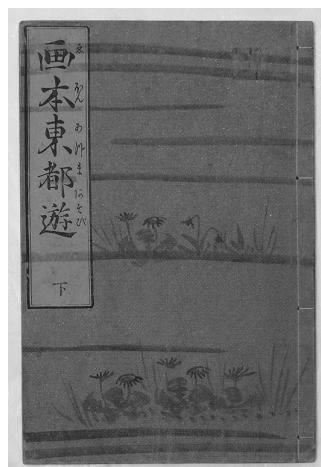


図5 同巻下 表紙

目西村源六 東都通油町蔦屋重三郎」と、4 書肆の連名がある。早稲田大学図書館蔵の改題色摺本<sup>(5)</sup>の奥付も同様である。

初版『東遊』の奥付は「寛政巳未（ママ）春日」（67オ）の次ぎに「画工 北斉（ママ）／筆工 六蔵亭／彫刻 安藤円紫／書林 東都通油町 蔦屋重三郎」（67ウ）とある<sup>(6)</sup>。初版『東遊』の序（1丁半）は末尾が「寛政十一のとし むつき 浅草菴（印）／華溪陳人書（印）（印）」とあるもの<sup>(7)</sup>と、「寛政十一のとし むつき 浅草菴（印）」のみのもの<sup>(8)</sup>の2種がある。華溪陳人は北斎の友人で書家の稲葉華溪<sup>(9)</sup>である。

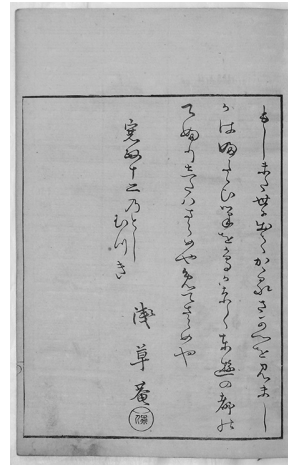


図6 同卷上 浅草庵序文末尾

永田生慈監修・解説『北斎の狂歌絵本』所載改題色摺本影印版、および早稲田大学図書館蔵改題色摺本の序末はいずれも、「享和二のとしむつき 浅草庵（印）」<sup>(10)</sup>であるが、林忠正旧蔵改題色摺本の序末（図6）は「寛政十二のとし むつき 浅草菴（印）」である。この序末は墨摺の初版『東遊』（寛政11年春刊）が評判となり、享和2年を待たずに寛政12年正月（睦月）以降、早い時期にこの改題色摺本が刊行されたことを示唆している<sup>(11)</sup>。

## 江戸名所長崎屋

林忠正旧蔵改題色摺本の絵の掲載順序を巻毎に題名で示せば以下の通りである。無題の絵は〔 〕内に仮題を示した。また商店の看板類も〔 〕内に摘記した。この掲載順序は初版と異なる。

上巻 9丁 8図

序 寛政十二のとしむつき 浅草菴（1丁半）／神明宮 春景／日本橋／飛鳥山／隅田川 春雪／待乳山／請地松師／梅屋舗（ママ）／牛島 中田屋（半丁）

中巻 8丁 11図

浅草海苔（半丁）〔看板「浅草田原町三丁目 御膳御海苔所 中寫屋平右



衛門製」／王子稻荷社／王子海老屋／駿河町越後屋／十軒店雛市／〔無題：長崎屋〕（半丁）／元結匠（半丁）／三圍神社／〔無題：紺屋〕（半丁）／今戸里（半丁）／絵草紙店（半丁）店先の暖簾「耕書堂」行燈型看板「通油町 紅画問屋 蔦屋重三郎」

下巻 9丁 10図

小町桜（半丁）／日暮里／上野／佃住吉社／佃白魚網（ママ）／品川汐干／浅草祭／新吉原／浅草葺市／鍔匠（半丁）

長崎屋の図（無題、半丁）は初版では「駿河町越後屋」と「十軒店雛市」の間に位置するが、この林忠正旧蔵改題色摺本では上掲のように、中巻の「十軒店雛市」と「元結匠」の間にある。図の匡郭の寸法は縦203mm、横153mm。上部の余白は高さ51mm。左下の匡郭外に「三十四」の丁付けがある。掲載順序と序末の「寛政十二のとしむつき」および奥付の欠如は、北斎館蔵の改題色摺本と特徴が一致している<sup>(12)</sup>。なお、永田生慈監修・解説『北斎の狂歌絵本』所載改題色摺本（影印版）とは、中巻と下巻の題簽が入れ違っている。また、早稲田大学図書館蔵の改題色摺本の上中下巻の構成と配列順序は序末の年月の違い、奥付の有無を除いて、林忠正旧蔵本と同一である。

ところで、林忠正旧蔵本の中巻末尾に位置する「耕書堂」「紅画問屋 蔦屋重三郎」の店先の図には、戸口に「浜のきさこ 狂歌よミかた小冊」「忠臣大星水滸伝 山東京伝作」「東都名所一覧 狂歌入彩色摺」「狂歌千歳集 高点の歌を集」という4枚の書名看板が掛けられている。この『東都名所一覧』乾坤2冊（画工 北斎辰政／彫工 安藤円紫）は蔦屋重三郎が須原屋茂兵衛、須原屋伊八とともに寛政12年正月に刊行したものである。『画本東都遊』色摺本の「寛政十二のとしむつき」の序を有する初期の版は、現存稀少ながら、『東都名所一覧』の続篇として刊行された形であり、長崎屋はこの版によって名実ともに、江戸名所の仲間入りを果たしたといつてよいだろう。

## 第2節 北斎図に描かれたオランダ人

『東遊』（1799）および『画本東都遊』（1800または1802）の北斎画「長崎屋図」にはオランダ人が描かれている。建物の構造からは1階か2階か判然としないが、江戸の庶民が屋外から見上げている構図からすれば、おそらく2階に

いるオランダ人であろう。

### 帽子

横棧の入った窓から外を眺めている二人のオランダ人はおそらく袖なしのゆったりとしたマントを着て、それぞれ丸ツバの扁平な帽子（右側）とツバが立て襟のような形の帽子（左側）をかぶっている。後者は18世紀後半に流行した三角帽（フランス語 *tricorn*e、オランダ語 *steek*）に多少似ているが、三角帽は丸みを帯びた三方のツバが反り上がり、天はこの帽子のように突き出していない。

色摺の『画本東都遊』では判然としないが、同じ版本を使用している墨摺『東遊』で二人の服装をよく見ると、左のオランダ人の耳元から顎にかけて、帽子の顎紐が確認できる（図7）。その紐は頬の上で小さな数個の玉のなかを通り、顎下と下唇に回して顎先を突き出す形で締められている。右側のオランダ人も顎が横棧に隠れているが、明らかに同じ顎紐を掛けている。このように細部も描いているところから、北斎は実際に長崎屋に出かけてオランダ人を観察したかもしれない。

### 髪とプロイク

巻き毛の頭髮は『画本東都遊』では赤く彩られ、地毛を描いたように見えるが、墨摺の『東遊』ではペリュク（フランス語 *perruque*、<sup>かつら</sup>鬘）を付けているように見える。17世紀後半から18世紀末まで、西欧では貴族や富裕層の男性のあいだで流行した。男性用ペリュクは小麦粉や米の粉から作られる<sup>かみこ</sup>髪粉を振りかけ白色または銀色とするのが一般的であった。ペリュクをオランダ語ではプロイク（*pruik*）という。髪粉はフランス語でブードル・ア・シュヴー（*poudre à cheveux*）、オランダ語でハールブードル（*haarpoeder*）またはハールプーエル（*haarpoeier*）という。船載蘭書の口絵や銅版図版にはしばしばプロイクをかぶった人物の肖像が見られるので、蘭学者たちは早くからプロイクの使用について、ある程度の知識をもっていたかもしれない。

しかし、長崎出島のオランダ商館長あるいは商館員がペリュク（プロイク）を使用したことを示す確実な資料はあまり見当たらない。蘭学勃興から80年ほど前の元禄時代にさかのぼると、出島医師エンゲルベルト・ケンペルは商館長



図7 北斎『狂歌東遊』長崎屋図（部分）東京藝術大学蔵<sup>(13)</sup>

の参府に初めて随行して江戸に滞在中、1691年3月29日の将軍拝礼に加わり、将軍綱吉の前で西洋の踊りやドイツ語のエリアを披露したことはよく知られている。その模様を描いた『日本誌』（オランダ語版、1733）の将軍拝礼図（第XXXII図）を見ても、丸いつば付の帽子をかぶって踊っているケンペルを含む一行4名が将軍の前でプロイクを使用していたかどうか、にわかに判定出来ない。

この銅版図の元となったケンペル自筆のスケッチ（The British Library, The Manuscript Collections, Sloane MS 3060, fol.514）<sup>(14)</sup>を見ると、『日本誌』の銅版図のケンペルは頭髪が短いのに対し、自筆スケッチの頭髪は肩から背中中央までに長く先細に垂れ下がっている。おそらく地毛ではなくペリュッケ（ドイツ語 Perücke）であろう。マントを着たまま畳の上に座って無帽の商館長以下、他の3人の頭髪の具合はよく分からない。スケッチから判断すると、ケンペルは足部分は不明であるが、長靴下（lange kousen）に短ズボン（korte pofbroek）をはき、上着は裾長でおそらく背後の腰下にスリットのあるロック（オランダ語 rok、コート）を着て、袖口にはフリルが付いている。

森島中良『紅毛雑話』は中良の兄で将軍侍医・蘭学者の桂川甫周国瑞が毎年長崎屋を訪れ、商館長一行から得た奇談雑話をもとに、中良が編集し、天明7年（1787）頃に刊行した。中良の凡例に「此書は我伯氏桂川国瑞法眼、公の御許を蒙りて、春毎に参向する紅毛人の客舎にいたり、薬品の鑑定、蛮書の不審

など、訳を重て討論の暇、蛮人の語りたる雑話に珍らかなる事あれば、今日なんか、奇談を聞きたるなど、うちものかたたる、を、唯に聞捨てんもほゐなければ、かりそめなるものに書つけ」、また蘭学者の会合に参加して「うち聞きたる事をも、筆の随にかきあつめたる雑録」と述べている通りである。

その巻之五巻末に桂川家収集品に基づく「紅毛服飾之図」がある。その末尾に「右紅毛服飾の図式は、或人の需に<sup>しりへ</sup>応じて、家蔵の蛮服を模写し、伯氏の説を記して、巻の<sup>かつら</sup>後に附する事しかり。森寫中良誌（印）」（附ノ八オ、下線は引用者）とある。その収集品のひとつとして、製作年代や桂川家の入手時期は不明であるが、「鬘<sup>かつら</sup>「プロイク」」が図入りで詳しく説明されている（図8）。説明文中のオランダ語は当時の原綴を補い、読みやすく句読点を改めて翻刻する。

鬘<sup>かつら</sup>「プロイク」(pruik)  
 頭形にすきたる木綿糸の網の上へ、木綿裁を縫つけ、その上へ毛を菱にあみたるをとぢ付たる物なり。髪<sup>づなり</sup>のさきを黒き切にて卷牛の尾の如く、後へさげたるを「スタール」(staal)といふ。すなはち尾といふ事なり。又黒き海黄<sup>かいき</sup>にて縫たる袋を懸たるあり。其袋を「ハールサック」(hairsak)といふ。「ハール」(hair)は髪、「サック」(sak)は袋の事なり。扱左右の鬘<sup>かつら</sup>の毛を蠟にて卷かため、惣牀をば彼邦の鬘付にて毛筋を揃へ、その上へ



図8 紅毛雑話 巻五 紅毛服飾之図 国立国会図書館蔵<sup>(15)</sup>



「ハールプーエル」(hairpoeder)といふ白き粉を振懸る。是は二毛<sup>しらがまじり</sup>に見せん為なり。地髪を結びたるにも此粉をふり懸る事なり。

「ハールプーエル」の表記は甫周が長崎屋でオランダ人から聞いたままの発音を書き留めたものであろう。「二毛」はオランダ語 grijsachtig または grauwachting (灰色がかった) の訳語であろう。プロイクの木版図では頭髮部分が黒く刷られているので、この収蔵品は髪粉をかける前の状態で伝わったものらしい。

北斎図の二人のオランダ人にもどろう。右のオランダ人が手に持って食べようとしているのは、その丸い形態から推測して、船乗りの保存食であったスヘプスベスホイット (scheepsbeschuit、船用ビスケット) かもしれない<sup>(16)</sup>。

## 服装

二人のまよっているのは上述のように袖なしのマント (mantel) らしい。左のオランダ人の胸元はフリル付きのジャボ (jabot) かフリル付きの襟巻 (das) か判然としない。色摺の『画本東都遊』では、胸元は頭髮と同じ赤色となっているので、不自然な印象を与える。襟巻きについては、『紅毛雑話』の「紅毛服飾之図」のひとつに、図解がある (図9)。しかし、このタイプは北斎図のオランダ人の胸元に該当しない。

この二人のオランダ人の間にわずかに顔を見せている人物は、色摺の『画本東都遊』では襟巻きらしきものが赤く刷られて判然としないが、『東遊』では和服を着ているように見える。かぶっている帽子は不明である。この人物はオランダ商館長のもとで私的な通詞の役割を果たしていた日本人使用人のひとりかもしれない<sup>(18)</sup>。寛政期から時代がすこし下るが、文政5年の江戸参府に随行したフィッセルは長崎屋を隠密に訪問する藩主や高官たちについて、「すべてオランダを解する出島の商館長の召使たち (Opperhoofds-dienaren) は、大抵はわれわれの私的通詞 (onderhandsche tolken) の役目を果たしていた。そしてこの場合はみな内密に來訪する藩主その他の高貴な人々なので、大官たちは、こうした機会に奉行所の通詞 (Gouvernements-tolken) よりむしろわれわれの召使たちを利用するのである<sup>(19)</sup>」と述べている。

簾を張り付けた格子窓に顔を覗かせている二人のオランダ人の帽子 (図6)

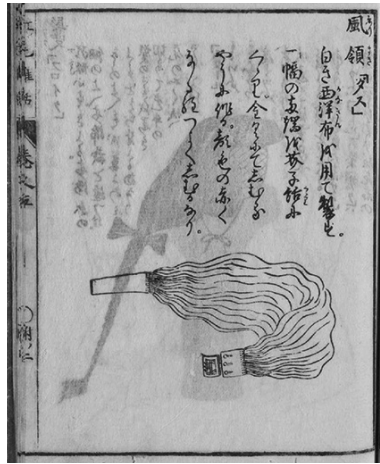


図9 紅毛雑話 巻五 国立国会図書館蔵<sup>(17)</sup>

はそれぞれ上記二人のオランダ人の帽子と同じタイプと分かる。しかも、左の人物の帽子は立て襟のようなツバが天の周囲をめぐる形態であることが分かる。

以上のごとく、この図には、都合4名のオランダ人が描かれている。参府する商館長一行は十八世紀後半の場合は通例、商館長（opperhoofd）、筆者頭（scriba）または簿記役（boekhouder）、上外科医（oppermeester）の3名であり、4名の例は見当たらない<sup>(20)</sup>。特定の年の商館長一行を北斎が実写したとしても、なぜ4名としたのか、理由が分からない。

### 灸方書の商館長一行図

18世紀後半に参府した商館長一行を実際に描いた確かな図はこれまで知られていなかったが、最近、明和4年（1767）に参府した一行を描いたと思われる珍しい彩色図が出現した。「神呪長寿灸」と題された灸方書（1舗、写本、57×70cm）の挿絵（図10）である。「かびたん へるまんかすてんす」「役人 うゑるれむゆうりす」「外科 やんふらんすでほうと」の3人が並んで立ち、「かびたん」と「外科」がそれぞれ、この灸方の図解を指さして語らっている構図である。

この灸方書の末尾に「寛政十二年庚申三月記 高崎八十一翁浦野東枝謹録」との墨書と落款があり、寛政12年（1800）は上述のように北斎の『画本東都遊』の成立時期と重なる。浦野東枝がどのような人物か不明であるが、その解説によれば神呪長寿灸は高家から伝えられた家伝の秘方であり、「此灸穴ハ往昔禪家の祖師入唐して帰朝に此法を伝来」した。「予医道にあらざれども病苦の人を救は聖賢の教なれば所謂此伝法を印行して信の交りあらん人に是を伝ふる事しかり」という。



図10 神呪長寿灸（部分） 個人蔵

灸方の権威付けに肖像図を利用されたこのオランダ商館長一行は、商館長ヘルマン・クリスチアーン・カステンズ（Herman Christiaan Kastens）、外科医ヤン・フランソア・デ・ハウト（Jan François de Hout）、簿記役ウィレム・ユリス（Willem Juris）の3名で、1767年（明和4）3月27日に江戸に到着。3月30日（旧暦3月朔日）に拝礼し、4月9日に江戸を出発している<sup>(21)</sup>。

外科医のデ・ハウトは翌年の江戸参府の帰途、明和5年4月2日（1768年5月17日）に京都で客死し、4月5日に茶毘に付され真如堂東陽院に埋葬された<sup>(22)</sup>。

この灸方書が書かれた寛政12年とそれより33年前の明和4年当時とでは、商館長一行の実際のモードは後述のようになかなり変化していたと推定されるが、その間に筆写が繰り返され広まったものと思われる。明和4年に作成されたであろう原図も作者も、同様の写本の存在も不明である。

3人の帽子は丸ツバの扁平な帽子で、北斎図のオランダ人がかぶる2種の帽子の一方と同じタイプである。しかし、北斎図と違って帽子に顎紐は付いていない。頭髮はそれぞれ地毛を観察して描いたものであろう。商館長と簿記役は赤毛、外科医はブロンドである。3人は同じタイプの長ズボン（lange broek）と靴（schoenen）を履き、長ズボンと靴の間を白い紐（band）付きの



図11 紅毛雑話 巻五 国立国会図書館蔵<sup>(23)</sup>



図12 神呪長寿灸（部分） 個人蔵

ヘスプ（gesp、留め金）で締めている。館長と簿記役は襟付きの袖なしコート（mouwloze mantel met kraag）、おそらく色違いの袖付きヴェスト（mouwenvest）を、また外科医は背後の腰下にスリットのある赤い裾長のコート（lange jas）を、それぞれ着ている。」

3人が足首に付けているヘスプは桂川家に実物が所蔵されていた。『紅毛雑話』の「紅毛服飾之図」に、大小2箇の図示（図11）とともに、「ゲスプル大なるは足袋につけ、小なるは袴につくるものなり。大サ図の如し。金、銀、めつき金銅などにて作る。しめ様は鎧の鞍轡金<sup>びじよがね</sup>の如し」とその説明がある。しかし、実際に足首に装着した図を欠いているため、この灸方書の商館長一行図（図12）は貴重である。「ゲスプル」の表記は聞き誤りであろう。

### 第3節 フェイルケ筆「長崎屋の二階」図

長崎屋に蘭学者たちが押し寄せ、商館長一行から新知識を学び取った様子は、大槻玄沢の手控え『西賓対晤』<sup>(24)</sup>に詳しい。この手控えは、商館長の名前とともに挙げれば、寛政6年（1794）ヘンミー（Gijsbert Hemmij）、寛政10年（1798）ヘンミー、享和2年（1802）ワルデナール（Willem Wardenaar）、文化3年（1806）ドーフ（Hendrik Doeff）、文化7年（1810）ドーフ、文化



11年（1814）ドゥーフの都合6回、一行と長崎屋の2階で対話した記録である。ただし、寛政10年のヘンミーは病気のため、玄沢と対話しなかった。ヘンミーは3月15日に拝礼。帰路、4月24日（1798年6月8日）遠州掛川で客死し、翌日、掛川の天然寺に葬られた<sup>(25)</sup>。

### フェイルケ図の写真

長崎屋2階の内部の図は、商館付き外科医ヤン・フレデリック・フェイルケ（Jan Frederik Feilke, 1779-1814）が1810年の参府時に描いたものが知られている。昭和15年2月1日より11日まで、東京日本橋の白木屋百貨店で開催された和蘭文化展覧会に、長崎の収集家永見徳太郎が「江戸長崎屋二階の図」と題して出品した資料である。フェイルケはスケッチを好んだようで、ほかに富士山図が4点伝わっているが、屋内図は長崎屋図のみのようである。この展覧会は皇紀二千六百年記念として財団法人文明協会が主催した。

「江戸長崎屋二階の図」は現在は所在不明であるが、『文明協会ニューズ 日本と世界』第161号（昭和15年3月10日発行）「和蘭文化展覧会号」の口絵に写真（図13）が掲載され、同号掲載の出品目録に「甲比丹ゾーフ江戸来府の為め文化七年長崎屋に滞在中、商人伊勢屋七兵衛訪問の図を随行の医師蘭人ヘルケが写生せるもの。伊勢屋七兵衛は甲比丹ロンベルグより蘭名アディヤンパウを貰ったが、ゾーフより新しくファン・ギュルペンの名を貰った程、蘭学を好んだ阿蘭陀趣味家であつた」（同号61頁）との解題が付けられている。

その写真をみると、画面の右下に「J.F. Feilke A<sup>o</sup> 1810」とのサインがあり、蘭名フレデリック・ファン・フルペンを名乗った江戸の菓子商の伊勢屋兵助（七左衛門）がひざまづいて、椅子に据わったオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ、簿記役（packhuismeester）ホーゼマン（Dirk Gozeman）、蘭医フェイルケの3人にむかって、和綴じの書物を手にして読み聞かせている。これらの人物の同定は、フェイルケのサインの年号および、各人物に添えられた「Fredrik van Gulpen」「Opperhoofd」「Gozeman」「Doctor」の書き入れとオランダ商館員給与支払名簿から判明する。

もっとも、この図に書き加えられたフェイルケのサインと年号、および人物名をフェイルケの自筆とするには大いに疑問がある。いずれも墨筆と推定され、運筆も遅く、アルファベットの書体も稚拙であり、日本人の手になると判

断される。フェイルケ筆と伝わる京都大学蔵「蘭人筆富士山図」（絹本墨彩）にも蘭文と「J:F Feilke A<sup>o</sup> 1812」のサインおよび年号が日本人の手で墨書されている<sup>(26)</sup>。フェイルケの長崎屋図も、同じ趣向であり、この永見徳太郎旧蔵品の絵の部分が発見されたフェイルケ自筆の作品だとしても、オランダ通詞あるいは伊勢屋七兵衛が何らかの功利的目的で関係している可能性がある。

### フレデリック・ファン・ヒュルペン

伊勢屋七兵衛の蘭名については、ドゥーフ自身がその『日本回想録』で、1806年京都滞在中に、来訪した本人に乞われて与えたことを述べている。「一八〇六年、私の初めての旅行のとき、京都で片言のオランダ語を話す人が来て語った。彼は江戸に住んでいて、何時もオランダ人を表敬訪問（opwachting te maken）していた。商館長ロンベルフ（Hendrik Casper Romberg）から、アドリアーン・パウ（Adriaan Pauw）という別名を与えられたが、彼はこれにはすでに古くなりすぎたと思い、別の名前を求めた。私は彼の要望に応じて、フレデリック・ファン・フルペン（Frederik van Gulpen）という名を与えると、彼は非常によろこんだ<sup>(28)</sup>」という。商館長ロンベルフの参府は天明4年（1784）、天明5年（1785）、天明7年（1787）、寛政元年（1789）、寛政2

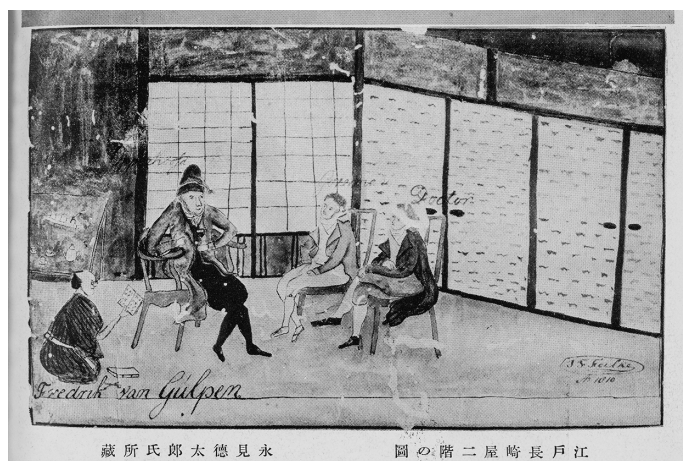


図13 長崎屋の二階 『文明協会ニュース・日本と世界』 第161号  
「和蘭文化展覧会号」（1940年3月）<sup>(27)</sup>

(1790) の5回におよぶので、ロンベルフが伊勢屋にオランダ名を与えた時期は特定できない。

伊勢屋七兵衛はドゥーフの証言のように、片言のオランダ語を話すだけでなく、オランダ語で手紙を書くこともできた。おそらく、文化3年(1806)に七兵衛がドゥーフから蘭名をもらった直後のことであろう。蘭学者辻蘭室は七兵衛を京都の宿に訪ねた。このとき七兵衛から受けた友誼と七兵衛が江戸に帰ってから添え状とともに送ってきた珍しい品々に対して、蘭室は蘭文の礼状を送った。その礼状の下書きと控えが京都大学附属図書館蔵の辻蘭室文書に伝わる。蘭室はのちに、七兵衛からの短いオランダ語の添え状と自分の「Aan den heer fredrik gulpen」(フレドリク・ヒュルペン殿)で始まる礼状の控え、及び礼状の漢訳、さらにオランダ語と漢文の由来書を合わせて軸装にしたようだ。

七兵衛の添え状を張り込んだ軸は伝わらないが、蘭室による蘭漢両語の由来書の下書きの前半に、「Deze kleine en groote twee schriften, de eene is te weeten op zeer korte wyze gestelde een zendebriefje, die van de gulpen te jedo gekoomen was」(これは大小二通の書状である。ひとつはすなわち短く認められた添え状で、江戸のギュルペン(氏)から届いたものである)、「此大小二張其小江戸キユルヘン所送老夫小牘短略忽綴者」(此れ大小二張なり。其の小は江戸キユルヘンの老夫に送るところの小牘にして短略忽綴の者なり)とある<sup>(29)</sup>。七兵衛はその後、蘭名を用いて蘭学者とオランダ語で文通していたらしく、1818年9月6日付けで蘭学者杉田立卿に宛てた短い蘭文書簡<sup>(30)</sup>が知られている。

## 長崎屋2階の構造

長崎屋2階の構造は、ドゥーフが1806年参府時の模様について、「我々が滞在し、そこから外出を禁止される上階の部屋(de vertrekken van het bovenhuis)は、まったく見晴らしがなく、ただ狭い小路が見えるだけである。そこには商館長のための二部屋(twee kamers voor het Opperhoofd)、筆者頭と医師の相部屋(eene voor den Scriba en den Doctor)、来客の応接にも使う共同の食堂(gemeenschappelijke eetkamer, waar men ook menschen ontvangt)、使用人の部屋、小さな浴室がある。この陰鬱な眺めと、拝謁の日以

外は家にいなければならないことを考えると、この滞在はあまり快適なものではない<sup>(31)</sup>」(下線と原綴は引用者)と記述している。このドゥーフの最初の江戸滞在中、4月22日(旧暦3月4日)に発生した大火で長崎屋は焼失した。ドゥーフ自身その避難の模様を回想記に記しているが、3度にわたる参府中の長崎屋2階の構造変化について何も述べていないので、おそらく、二度目に参府した1810年には前と同じ構造の2階が再建されていたであろう。

フェイルケの描いた部屋は絨毯が敷かれ、右側面は唐紙の襖4枚、正面に障子2枚、左奥には暗くて判然としないが、食器を上にした洋机が確認できる。したがって、この部屋をドゥーフのいう「来客の応接にも使う共同の食堂」と推定するのは自然であろう。

しかし、今回出現の桂川甫賢筆「長崎屋宴会図」の写真(図14および口絵1参照)によって分かるように、フェイルケの図から12年後の文政5年(1822)描かれたこの2階広間は、向かって左側に障子2枚、正面には床の間が設けられ、その右は唐紙が壁紙として床面から天井まで一面に張られている。また、右側面はわずかし描かれていないが、明らかに唐紙の襖となっている。たしかに甫賢図の壁紙の模様とフェイルケ図の襖の唐紙とは、雲を散らした同じ模様と推定される。しかし、構造的特徴は絨毯の存在を除いて、フェイルケの描いた部屋と一致しない。長崎屋はしばしば火災で焼失している。商館長日記の1821年3月21日の条は、江戸に大火があり「われわれの宿舎もふたび被災した」<sup>(32)</sup>という知らせを記載している。長崎屋はこの火災の後に建て替えられたはずである。

甫賢図は文政5年の商館長一行のひとり、フィッセルが帰国後に著した『日本風俗備考』(1833)の次の記述にみえる「第四の部屋」(共通の広間)を描いたものと判断できる。

われわれは長崎屋(Nagasakiya)に到着した。そこでわれわれは四部屋を与えられたが、それらの部屋は、狭い通りに面している二つの窓(twee ramen)を除いては、すべて中庭(binnenplaats)に臨んでいた。商館長は二部屋(twee vertrekken)を占領し、筆者頭(Scriba)と医師(Doctor)は空き部屋一室(eene vrije kamer)を占める。そして第四の部屋は共通の広間(de algemeene zaal)であり、訪問者の応接に使用される(tot ontvangen van bezoeken ingerigt)ものであるが、一方この広間に



は、オランダの椅子 (stoelen) や机 (tafels)、絨氈 (tapijt) および若干の小家具 (eenige kleine meubelen) を置いて、またたくまにヨーロッパ風の外観 (een Europeesch aanzien) を呈するようになった。従僕達はその部屋を同じ階にもらっている<sup>(33)</sup>。(下線と原綴挿入は引用者)

## 第2章 桂川甫賢筆長崎屋宴会図

この宴会が開かれた文政5年2月27日は1822年4月18日にあたる。商館長ブルムホフは2月5日(3月27日)に江戸に到着し、2月15日(4月6日)に將軍拝礼を終えた。拝礼後に、一行は長崎屋で蘭学者の桂川甫賢、大槻玄沢、宇田川玄真、高橋作左衛門らと楽しく交流した。しかし、一行は幕府官医(漢方医)の集団から質問攻めにあったという。この宴会では義務から解放され、2月30日(4月21日)の江戸出発を前に歓楽を尽くしたようだ。

本図(図14および口絵1参照)には、10人の人物が描かれている。うち洋装の3人は日本人である。残る和装の7人のうち、2名はオランダ人、2名は日本人女性である。以下、まず、和装のオランダ人(2名)、洋装の日本人(3名)、和装の日本人(5名)にグループ分けして、人物ごとに主に日欧文化交流史、洋学史の観点から、図像を考察しよう。次ぎに本図の日本人の洋装は前章でも利用した森島中良『紅毛雑話』巻之五巻末の「紅毛服飾之図」と密接に関わるので、洋学史の観点から服装史にかかわる若干のテーマを取り上げることにする。甫賢図の2階広間の構造についてはフェイルケ図との比較で、前章において若干の考察を加えた。

建築史、服装史、美術史、食文化史などからの専門的考察は今後、本図の共同研究のなかで進めることにしたい。

### 第1節 和装のオランダ人

画面手前左側に、座布団に正座した和装のオランダ人が2人描かれている。2人とも脇差を差したままである。2人の座布団は同じ唐草模様の豪華な座布団である。

## 2 人の服装

2 人のうち、黒紋付の羽織に袴をはき、頭巾をかぶった左上のオランダ人には「De Heer Operhoofd」(商館長殿)、手前に背を向け、薄茶色の肩衣と青色の袴からなる継袴を着て、短髪の若いオランダ人には「De Heer Fisscher」(フィッセル殿)と、それぞれペンとインクで書き込まれている。商館長はヤン・コック・ブロムホフ (Jan Cock Blomhoff, 1779-1853)、この時、43 歳。フィッセルは 1 等書記のヨハネス・フレデリック・ファン・オーフルメル・フィッセル (Johannes Frederik van Overmeer Fisscher, 1800-1848)、22 歳である。

フィッセル<sup>(34)</sup>は袴から両足の白足袋を覗かせている。左脇には黒の塗笠、右脇に手付き煙草盆、前には脚と縁が朱塗りの客膳が置かれている。煙管は見当たらない。商館長は右手に煙管を持ち、左膝の上に赤茶色の懐中煙草入れを置き、左脇にはフィッセルの右脇と同じ手付き煙草盆が見える。2 人の煙草盆には同じ染付火入れと灰吹の竹筒が入っている。



図14 桂川甫賢筆 長崎屋宴会図 神田外語大学附属図書館蔵

## ブロムホフ

商館長ブロムホフ<sup>(35)</sup>の前任者ドゥーフは1799年夏来日し筆者頭をへて1801年に荷倉役、1803年に商館長に昇進。フェートン号事件（1808年10月、英国軍艦の長崎港侵入）、英国東インド総督ラッフルズの計画した出島商館接收工作（1813）を機敏な外交手腕で切り抜けた。フランス革命下、本国が1806年フランスの属国となり、1810～13年は併合されたため、蘭船の長崎入港が1810年から1816年まで事実上6年間途絶えた。このためドゥーフは都合19年間の日本滞在を余儀なくされ、窮乏生活を強いられた。この長期滞在中、長崎方言まじりであったが日本語に習熟したドゥーフは、通詞のオランダ語力を高めるため、1811年から1817年帰国直前まで、吉雄権之助、中山作三郎ら優秀な通詞の協力を得て、蘭和辞典ドゥーフ・ハルマの編纂に邁進した。蘭学の発展におけるドゥーフの語学的貢献は、愛弟子馬場佐十郎の養成とともに、高く評価されるべきである<sup>(36)</sup>。

これに対し、ブロムホフは荷倉役（1809年10月～1813年9月）として4年間、ドゥーフをよく補佐しつつ、長崎奉行の命によるオランダ通詞の英語学習を指導した。指導を受けたオランダ通詞、本木正栄・馬場為八郎・末永甚左衛門・植林栄左衛門・吉雄権之助の5名は、1814年夏、英和对訳辞書『諸厄利亜語林大成』を完成させた。前年12月、ブロムホフはドゥーフの命によりラッフルズとの外交交渉のためバタヴィアに派遣されたが失敗して監禁され英国に送られた。1815年釈放され帰國中、国王から出島商館長に任命されたが、ナポレオン再挙の戦乱のため着任が遅れ、長崎到着は1817年8月16日となった<sup>(37)</sup>。以後1823年11月20日の退任まで6年3ヶ月余り、文政期の爛熟した日本文化を享受した。

長崎到着の際、妻子と使用人を伴って来たため、日本人の注目の的となり、ブロムホフ家族の画像資料が多く残されている。そのひとつ、「阿蘭陀カピタンヤンコックフロンホフ一行図」（早稲田大学蔵）に描かれた上陸時のブロムホフ肖像（図15）に注目しよう。賛には、「文化十四丑年四月長崎江渡来之壹番船ニ乗来候カピタン○ヤンコックフロンホッフ妻子並乳母下女ヲ連来ル（中略）右妻子等は在留不相叶本国江帰ル右婦人之生写之画見え候俣早忽ニ写拵」とあり、もっぱら婦人たちに注目している。渡来を「丑年四月」とする根拠は不明である。

描かれたブロンホフは、縦縞の白い長ズボンをはき、ズボンの裾と靴の間に、ヘスプ（gesp）を巻く。赤いヴェスト（vest）の上に、高い襟の付いた薄青色のロック（rok）を着て、襟巻（das）を固くしめ、帽子はツバの狭い（smalle rand）、飾り付きの山高帽（hoge hoed）をかぶる。右手にサーベル（sabel）、左手に赤いハンカチ（zakdoek）を持つ。山高帽は前世紀流行の三角帽子（driekantige steek, tricorne）や二角帽（bicorne）に取って代わっていた。

江戸滞在中、ブロンホフは桂川甫賢、宇田川玄真、宇田川榕菴、大槻玄沢らの蘭学者、幕府天文方高橋作左衛門景保、平戸藩元藩主松浦静山、また、中津藩主奥平昌高の家臣らと交流し、蘭学の発展に寄与した。また、二度にわたる参府旅行を利用して、各地で日本文物の収集に努め、膨大なコレクションを本国に持ち帰ることに成功した<sup>(38)</sup>。



図15 ブロンホフ肖像<sup>(39)</sup>  
早稲田大学図書館所蔵

ブロンホフの最初の江戸参府は1818年（文政元年）のことで、4月12日（3月7日）江戸着、4月20日（3月15日）拝礼、5月4日（3月29日）江戸を発った。「長崎屋宴会図」に描かれた宴会は、1822年（文政5年）の二度目の参府で長崎屋に滞在中、4月18日（2月27日）のことであった。この年、ブロンホフ一行は、2月6日（1月15日）長崎を発ち、3月27日（2月5日）江戸着。4月6日（3月15日）拝礼し、4月21日（3月30日）江戸を発ち、6月5日（4月16日）長崎に帰着している。宇田川榕菴との交流で知られる出島医師トゥリング（Nikolaas Tullingh）も随行したが、ここには描かれていない。

### フィッセルと素人芝居

1820年7月23日（文政3年6月14日）に来日したフィッセルは、この文政5年の参府が初めてであった。1823年夏に筆者頭（scriba）に昇進。その年、フォン・シーボルトが来日するや、その日本語資料の収集に協力するとともに、みずからも日本文物の収集に努め、1825年8月には荷倉役となった。1829

年2月に離日。帰国後、日本で蒐集した資料と見聞をもとに豪華な絵入り本『日本風俗備考』（アムステルダム、1833）を著した<sup>(40)</sup>。

「長崎屋宴会図」に描かれた仮装宴会は演劇の様相を見せている。和装の商館長ブロムホフとフィッセルが下座に座り、床の間の前の上座には洋装の日本人3人が椅子に座ったり立ったりして、招客然としている。芝居好きのフィッセルは出島で何度も同好の商館員仲間と素人芝居を行っていたので、この仮装宴会の演劇的趣向に満足していたことであろう。

ブロムホフの許可を得て出島で上演された素人芝居（*liefhebberij tooneel*）は1820年の4回分が商館日記に記録されている<sup>(41)</sup>。その記録を摘記すると、初回は9月17日の喜劇「結婚の策略あるいは二人の兵士」（*De Huwelijks ontworpen of de Twee militairen*）<sup>(42)</sup>で、観客のうち日本人は出島の「乙名たち、通詞たち、およびその他様々な日本人たち」であった。

2回目は10月13日の喜劇「短気な人」（*De Ongeduldige*）<sup>(43)</sup>、ついで一幕物のアリエッタ付き喜劇「二人の猟師とミルク売り娘」（*De Twee Jaegers en 't Melkmeisie*）<sup>(44)</sup>の二本立てで、観客のうち日本人は当日「出島で当番であった現役の検使と、ほとんどすべての通詞たち等々」であった。

3回目は新任の長崎奉行間宮筑前守信興の着任祝いと、商館の貿易額増額承認に尽力し、離任する長崎奉行筒井和泉守政憲の送別を兼ねた宴席の余興として、10月20日に13日と同じ2つの喜劇が上演された。観客は両奉行一行である。この時、筒井奉行はあらかじめ二喜劇の粗筋の翻訳をあらかじめ入手していた。その写本<sup>(45)</sup>によると、フィッセルは「短気な人」で主役、「二人の猟師とミルク売り娘」では娘に懸想する猟師と娘の恋人騎士の1人2役を演じた。ブロムホフは世話人としてこの上演を成功させたフィッセルに謝意を述べ、奉行の謝意も伝えたという。

4回目は両奉行と一緒に観劇できなかった出島の用人・検使・町年寄たちの要望を受けて、10月22日に同じ2喜劇が上演された。随行した2人の唐大通事も観劇し、この日の上演の模様は奉行の命を受けた絵師川原慶賀が芝居絵を描いた<sup>(46)</sup>。

出島で上演された以上の3喜劇は、いずれも原典は18世紀後半のフランス人劇作家の喜劇作品であるが、「短気な人」以外の2作品は同時代に、アムステルダム劇場（*Schouwburg Amsterdam*）でしばしば上演されている<sup>(47)</sup>。



## 第2節 洋装の日本人

座敷の正面に描かれた洋装の3人は日本人である。3人のうち、椅子に座っている左端の小柄な人物には「Abraham」、中央の同じく椅子に腰掛けている一番派手な洋服を着ている人物には、「Botanicus」、右端の椅子の前に立っている人物には「Van der Stolp」と、それぞれオランダ名がインクとペンで書き添えられている。

### アブラハム

Abrahamはオランダ通詞出身で天文方手代として、文化5年(1808)4月頃から幕府天文方高橋作左衛門景保のもとで翻訳に従事していた馬場貞由(佐十郎、1787-1822)である。アブラハムという蘭名の由来をブロムホフの前任の商館長ドゥーフは次のように述べている。

一八一〇年の私の二度目の参府で、私は、元は長崎で私の弟子で、一八〇八年に幕府から江戸に召し出された、オランダ通詞に会った。このあらゆる点で優秀な青年は、馬場佐十郎が本名だったが、出島のオランダ人からは、アブラハムという愛称(bijnaam)で呼ばれていた。そこで江戸でオランダ語を学ぶ何人かの人は、オランダ名を持ちたいと願い、アブラハムはそれを求めたので、私は彼の友人数人にこれを与えた<sup>(48)</sup>。

ドゥーフが佐十郎の求めを受けて蘭名を与えた「数人」とは、まず最初に佐十郎の上司である「高橋三平」すなわち天文・地理学者の高橋作左衛門景保だった。次ぎに將軍侍医の桂川甫賢、中津藩主奥平昌高側近の神谷源内、そして最後に源内の主君奥平昌高の4人だった。ドゥーフは有能で勇敢かつ温厚な景保とは1817年に帰国するまで親交を深めたという。

私はこのように尊敬すべき人に、オランダ名を与えることに実際当惑した。しかし、彼自身が、長い間これを迫ったので、私は遂に、彼にヨハネス・フロビウス(Johannes Globius)の名を選んだ<sup>(49)</sup>。また將軍の侍医の一人で、オランダ語だけでなく、熱心に植物学を学んだ桂川甫賢(彼の祖父については、ツェンペリーが言及している<sup>(50)</sup>)のために、彼自身の求

めに应じて、私はヨハネス・ボタニクス (Johannes Botanicus) という名前以上のものを考えつくことはできなかった。中津の大名〔奥平昌高〕は薩摩の大名の次男で、將軍の義父であるが、その秘書であり、藩士の一人〔神谷源内〕は、私からピーテル・ファン・デル・ストルプ (Pieter van der Stolp) の名を得た。彼の主君、上記の大名も、彼に名前を与えてほしいと、私に強要して已まなかったので、私は遂に彼にフレデリック・ヘンドリック (Frederik Hendrik) の名を与えた。私が日本を立ち去ったとき、オランダ名を持っていた人は、これで全部である<sup>(51)</sup>。

馬場の蘭学史上最大の功績は、長崎時代の恩師中野柳圃 (志筑忠雄) のオランダ語文法研究の成果を江戸にもたらし、江戸の蘭学者たちのオランダ語力を飛躍的に高めたことであろう。馬場の編纂した「蘭学梯航」(1816) は当時最高水準のオランダ語文法学習書だった<sup>(52)</sup>。馬場自身、京都の蘭学者藤林普山著『医門須知 和蘭語法解』(文化12年1815、水玉堂刊) に寄せたオランダ語序文において、江戸及び京都における恩師の門流を述べている。原文を翻刻し、引用者の和訳を付けよう。

[1 オ]

Voorreede

Hoe noodzaakelijk het is, dat de Geene, die de hol- / landsche boeken leeren willen, in deeze spraakkunde / ervaren zijn, is gemakkelijk te begrijpen; door deeze / ervarenheid is men niet alleen in staat, om de ge- / schreeven werken, Namentelijk van de genees en heel- / kunde, met nut en voordeel te leezen, maar men / verkrijgt daar door ook de bekwaamheid om de zieken / behoorlijk te behandelen, ja ook om de overzetting / [1 ウ] in onz moeder taal, zonder fouten, te doen. in veele / overzettels die nu in het ligt gebragt zijn, vind men / wel misslagen, het welk zijn gesprooten alleen uit de / onervarendheid in deeze spraakkunde, waardoor als / men, met het leezen van zulke boeken de vrugten / daar uit te plukken, en met de desselfs overzettinge / het voordeel voor den anderen te zaaijen wil, is het / best, dat men ten eersten deeze taalkunde leert.

Voor omtrent 100 jaaren waaren verboden dat de / Japanders de hollandsche letteren te schrijven, en / [2 オ] had men de hollandsche taalen bij mondeling geleert, dus / was het onmogelijk te bevorderen, maar na het permis- / sie van dezelve te leeren, van tijd tot tijd was merkelyk / bevorderd, en dewijl 'er nogtans geen regt regel en wijs / van spraaken genoeg bekend was, heeft men wel abuijs / zo in het schrijven als in het vertaalen gedaan, maar / zedert de ontdekking van de opregt smaak van de / spraakkunst, door onzen wijdberoemde meester N. / liuho in het Jaar boenkwa Eerste, gedaan, zijn de / duister' wolken, die hier en daar overhingen, geheel / [2 ウ] verdweenen, gevolglik moet men hem altoos in Eerbied / blijven; hij is zeer zwak van gesteltenis geweest, maar / door zijn leerzuchtigheid van aart heeft hij altoos den neus / op de boeken gehouden, en Eindelijk zodanig groot dienst voor ons gedaan, maar tot ons ongeluk is hij drie jaaren / daarna, in het vierde jaar boenkwa, op 47 jaaren oud, in Nangazakij, gestorven.

de Nakomelingen van den heer liuho zijn maar / drie in het Eerste, namelijk J. Rokziro, N. kitse- / mon en de ondergetekende, waar van de Eerste is nu / ook in Nangazakij, de tweede is reets dood, en de derde / word daar na aan 't hof Jedo ontboden; door deeze laatste heeft / de gemelde Liuhooaanse leerregel eerst aan de leergenoot / te Jedo medegedeelt, waar onder Woedagawa en Foeziï zijn / de voornaamste, die dezelve eerst wel bevatten hebben.

de docter F. Taijskij in Miaco woonende is een van de / nakomelingen van onzen leerregel, en is zeer leerzuchtig van aart, hij vlijt en naarstigd met de overzettinge van de / spraakkunst, uijt het zelfde oogmerk dat ik hier bo- / ven gesproken heb, en ter drukpers gebragt, gelijk / [3 ウ] men hier nader zal ontwaaren; wat dit werk aan- / gaat mag men zeggen dat een fakkel ligt voor de / leerlingen is, den vijf en twintigste van fatiguats / in het Jaar boenkwa Twaalfde, is geschreeven

Door

BBa: Sazuro

(和訳)

## 序

阿蘭陀語の書を読まんと欲する者に、その文法に通ずることの如何に不可欠たるかは、よく人の理解する所なり。この実地の知識を以て始めて、書物、即ち内科外科の書を有益かつ有利に読解しうるのみならず、また此により病人を正しく治療し、また無論、誤り無く我が母国語に翻訳するを可能ならしむ。現今出版されたる多くの訳篇は実に誤りに満ちたり。ひとえにこの文法の無知によるものなり。従て、上記の医書を読み、その成果を摘み取り、また、その翻訳を以て他者にその益を播種せんとするならば、最善は、まず第一にこの文法を学ぶことなり。

およそ百年以前、日本人は阿蘭陀文字を書くことを禁ぜられ、阿蘭陀語を口頭にて学びたり。故に進歩は不可能なりき。然れどもその学習を許されてより、時によりて著しき進歩あり。他方、言語の正則及び正用法を未だ十分に知らざれば、作文にても翻訳にても誤用しばしばなりき。しかるに、我等が名高き師、中野柳圃によりて文化元年、文法の醍醐味の発見されしより、ここかしこを覆いたりし暗雲は消え去りぬ。是を以て人は彼を常に尊敬すべし。彼は甚だしく蒲柳なりき。然れども好学の素質ありて、常に鼻先を書物中に入れたり。しかも遂には、我等に実に大なる恩恵を及ぼしたり。しかし、我等が不幸なることに、その三年後、文化四年、四十七歳にして、長崎に没したり。

柳圃の門流中、主たる者は三人のみ。即ち、吉雄六次郎（権之助）、西吉右衛門、及び下記署名の者なり。第一の者は今、同じく長崎にあり。第二の者は既に死せり。第三の者はその後、江府に召されたり。上記の柳圃の学理は、この最後の者によりて初めて、江戸の同学に伝えられたり。就中、宇田川（玄真）、藤井（方亭）はその主たる者にして、最初にこれをよく習得したり。

都に住する藤林泰助は我等が門流の一人なり。実に好学の素質に富み、上述したる同じき観点より、勤勉努力して文法書を翻訳せり。以下爰に見らるる如し。この著作とは言えば、学生にとりての松明なりと言うべし。

文化十二年八月二十五日誌す

於江戸

馬佐十郎

## ボタニクス

Abraham すなわち馬場佐十郎の右に同じく椅子に座っているボタニクス (Botanicus、植物学者の意) は、したがって、この宴会図の作者の将軍家侍医・蘭学者桂川甫賢 (1797-1844) に他ならない。ドゥーフはこの引用文中で、甫賢に与えた蘭名を Johannes Botanicus と記し、本文の脚注で「この植物学者 (die kruidkundige) は有名なレインワルト教授 (den beroemden Hoogleeraar REINWARDT) が東インド滞在中に、教授とオランダ語で文通していた。私はこれを教授本人から聞いた」と述べている。

しかし、Johannes の名前 (voornaam) はドゥーフの記憶違いであった。甫賢はこの絵の下部の余白に蘭文で、以下のように画題、日付をペンとインク書き入れ、「W: Botanicus」と自署し、桂川の姓を直訳したオランダ名「Caneel Rivier」(カネール・リフィール) を添えている。

Den 27<sup>ste</sup> van Niguats op malkander plaisieren in Hospes Genijmonnsche huis in Jedo — A<sup>o</sup> 1822. /Afgetekend door/

W: Botanicus of Caneel Rivier junior. 「国寧」(朱文長方印)  
(2月27日江戸の旅館主人源右衛門宅における交遊の際 1822年 W. ボタニクスまたは桂川ユニオル画)

朱印の「国寧」(くにやす) は甫賢の名である。この朱印は「桂川印譜」<sup>(53)</sup>に見当たらない。「W: Botanicus」の略号「W:」は桂川家に伝わった甫賢の名刺に「WILHELMUS BOTANICUS/ Keizerlyk-Doctoor / van / JAPAN」、  
「Wilhelmus Botanicus / Kaneel Rivier Junior / Keizerlyk Doctoor / van/ JAPAN」<sup>(54)</sup>とあることによって、Wilhelmus と判明する。「Caneel Rivier junior」(桂川 2 世) は家督を相続する文政10年7月4日 (1827年8月25日) 以前であることを示す。

甫賢は将軍家侍医・蘭学者桂川甫周 (1751-1809) の孫にあたる。甫周は桂川家第4代。父は第5代桂川甫筑。文政5年 (1822) 当時、甫賢は26歳。文政元年 (1818) プロムホフが最初の参府で江戸到着するや、ウィルヘルムス・ボタニクス (甫賢、22歳) は、ピーテル・ファンデル・ストルブ (神谷源内)、フレデリック・ファン・ヒュルベン (伊勢屋七兵衛) と一緒に長崎屋を訪問



し、それぞれオランダ語の名刺を差し出した<sup>(55)</sup>。甫賢は当時から蘭学界の貴公子的存在であった。翌文政2年12月23日には医学精進を幕府から表彰された。桂川家譜に「医学出精之段達御聴一段之事ニ候旨御沙汰有之、猶此上出精可仕旨蒙仰候<sup>(56)</sup>」とある。上記のようにドゥーフの証言によれば、バタビア学芸協会初代会長で博物学者のカール・レインワルト (Caspar Georg Carl Reinwardt, 1773-1854) と文通していた。その書簡が伝わっていれば、W. Botanicus の署名が見つかるだろう。

文政5年、江戸滞在中の商館長ブロムホフに甫賢が贈ったと思われる日本産奇品標本の箱書きが、ハーグの国立公文書館所蔵ブロムホフ文書に伝わる。筆者はこの文書を調査する機会を得ていない。岩生成一撮影の写真<sup>(57)</sup>によって、末尾に、「W<sup>s</sup>: Botanicus」との署名を確認できる。甫賢自筆の蘭文全文を以下に翻刻しよう。文中の Producten (産品) は Provinciën (諸州) の誤記であろう。下線は引用者。

In Deze 3 Kassen zijn Bewaard / 111 Soorten Verscheide Mizeration off / Zeldzaamheden Die in Japansche / Producten [sic] en Zommige Omleggende / Eilanden Gevonden worden / Aan den WelEd Heer / 'T Opperhoofd J:C<sup>k</sup>: Blomhoff / Geschenk / tot Gedachtenis / van zijne Goede Vriend / en Welwenscher / W<sup>s</sup>: Botanicus / Keizerlijke Doctor van Japan / Ao 1822. 5 jaar van Boenseij

(これら三箱には日本の諸州および周辺のいくつかの島々に見られる111種の様々なミゼラシオン、すなわち奇品が収納してあります。商館長 J.C. ブロムホフ殿へ、その善良なる友人にして幸あれと願う者の記念として、お贈りします、文政5年1822年、日本の将軍侍医 W ボタニキユス)

引用文中の下線部「Mizeration」は日本語の「めずらしい」から借用されたオランダ語で、珍品という意味で出島のオランダ人仲間で使用されていたらしい。甫賢は1824年にはブロムホフの後任商館長スチュルレル (Johan Willem de Sturler, 1776-1855) 宛に「VAN DE GESLAGT BOOM」(家系について) と題して、桂川家歴代の業績をまとめた書簡<sup>(58)</sup>を送り、その末尾に「Den 7 jaar / van / Boenseij, / A<sup>o</sup>. 1824. / Dienaar & Vriend, / KANEELRIVIER Ju-

nior. / W. BOTANICUS. / Deze naam gekreigen van den Heer opperhoofd Doeff.」(文政7年1824年、従僕にして友人、カネールリフィール・ユニオル、W・ボタニクス。この名は商館長ドゥーフ殿より賜れり)と記した。この書簡のなかでも、祖父甫周について「(四代目の)彼は洋書その他の書物を翻訳し、それを将軍に献上しました。そして実に様々な奇品をミゼラシオンとして(zo wel verscheide raritijten als mizeration)所蔵しました。それらは今に至るまで私の大切な宝物として伝わっております」とその業績を紹介している。

のち、1826年には参府したシーボルトと親交を深め、すでに早くに完成させていたらしい小野蘭山・島田重房『花彙』(1759～1763)の蘭訳稿本「Qua Ji of Versaameling van Planten en Gewassen」<sup>(59)</sup>を献呈し、末尾に「Aan / De WelED: Heer / D<sup>r</sup>: von Siebold / van / 1826. / zijn / Goede Vriend / D<sup>r</sup>: KR: WBotanicus」(フォン・シーボルト博士殿 1826年、その善良なる友人、医師 KR: W ボタニキウス)とペンとインクで署名している。KRはKaneel Rivierのイニシャルである。

時期は不明であるが、甫賢はバタビア学芸協会の通信会員となった<sup>(60)</sup>。シーボルト事件にもめげず、小関三英など蘭学生を屋敷に住まわせ支援した。画才があり、渡辺華山と交友した<sup>(61)</sup>。杏雨書屋蔵「麝図」<sup>(62)</sup>のように、舶載された博物書の銅版動植物図の優れた模写を残している。「長崎屋宴会図」のように図版模写ではなく、実際の人物を精細に描写した甫賢図は他に知らない。

### ファン・デル・ストルプ

椅子の前に立っているファン・デル・ストルプ(Van der Stolp)はオランダ語に通じた中津藩主奥平昌高(1781-1855)の側近神谷弘孝(ひろよし、源内)である。神谷は奥平昌高の企画により、馬場貞由の協力のもとに、我が国最初の日蘭辞典『蘭語訳撰』(1810)<sup>(63)</sup>を編纂発行した。和洋折衷装丁の5巻5冊本で、各巻頭に蘭文標題紙を持つ。「蘭語訳撰」の書名は標題紙にも表紙にもなく、凡例に見えるものである。その標題紙では以下のように、Doorで示される「編者」奥平昌高もbijで示される「刊行者」神谷弘孝も、ドゥーフからもらったFrederik Hendrik(昌高)やPieter van der Stolp(神谷)の蘭名ではなく、本名を姓名の順に、オランダ語式ローマ字で表記している。蘭名

はこの場合、姓（achternaam）と名前（voornaam）の両方である。このオランダ語の姓名は蘭学仲間やオランダ人との会話や書簡に限って使用されるものだった。下線部は朱刷を示す。

Nieuw Verzameld / Japans en hollandsch / WOORDENBOEK / Door / den Vorst van het Landschap / Nakats / Minamoto Masataka / 1 [-5] Deel. / (fig.) / gedrukt bij zijn dienaar / Kamija Filojosi. 1810.<sup>(64)</sup>  
(新撰日蘭辞書 中津藩主源昌高編 巻1 [-5] 下臣神谷弘孝刊の意)

『蘭語訳撰』の序文は馬場がオランダ語で書いている。これを以下に翻刻し、和訳を付けよう。序文に丁付なく、丁数は私に付けた。パラグラフ内の改行は／で示す。

[1 オ]

VOORREDE.

De waereld is van ouds af in / vier deelen verdeelt, Namelijk: Eu., / ropa, Azia, Afrika en Amerika, / vervuld ieder deel met inwoonders, / maar elk zijn van onderscheiden,, / telijk natuur, aart, spraak enz. / als men de natuur en de aart van / de Europeanen met die der Azia,, / ners vergelijkt zoo zoude men kunnen / zeggen, de Europeesen zijn als / steen, en de Azianers als hout, / want de steen is zwaar, zinkt / [1 ウ] en Blijft stil, het hout is ligt, / en drijft, dus de Europeesen door / haare stil en bedaaend natuur / kunnen veel wonderlijke konsten / ontdekken, maar de Azianers / kunnen het zelden; om deze re,, / den heeft de vorst van Nakats / reeds ondernoomen om de hollands / taal te leeren, om met het Lee,, / zen van Europeese Boeken de nut,, / tige en verstandige konsten te vin,, / den, en daar mede zijne veelvuldige / onderdaanen tot verstandig en be,, / [2 オ] kwaam te maaken.

de ondergetekende van voorleeden / Jaar op Keijzers order aan 't hof / in Jedo zijnde, op zekeren tijd / door gemeld vorst verzogt zijn, om / op een gemakkelijke wijze de hollan,, / dse taal te Leeren, daartoe Een / middel uit te vinden. — hoewel / ik door veel keijzers zaaken geen

/ tijd heb, ben ik egter over de Leer., / zugtigheid van den vorst zeer  
ver., / genoeg, en heb alle de woorden / die ik van Buijten geleerd, door  
/ [ 2 ウ ] zijn Edele dienaar Kamia Filojosi / laten afschrijven en  
daarna heeft / den vorst zelfs verzameld, het welk / dit deel behelst zoo  
als men het hier / zal ontwaaren.

geschreeven

door

zijn hoogheids altoos berijd

willige Dienaar

te Jedo A<sup>a</sup> 1810 of 't

BBa: Sadajosi.

nengo Boenkwa

keijzerlijk translateur van

6<sup>de</sup> Jaar.

hollands taal te nan.,

gasakij

(和訳)

#### 序

世界は古より四部に分かつ。則ちヨーロッパ、アジア、アフリカとアメリカとなり。各部住民に満つ。然れども各々、性、質、言などを異にせり。ヨーロッパ人の性、質をば、アジア人のそれと比較せん。ヨーロッパ人は石の如く、アジア人は木の如しと言うべし。石は重くして水に沈み、静にして不動。木は、軽くして水に浮遊すればなり。かくして、ヨーロッパ人はその性、静にして着実なるを以て、能く驚くべき技術を發明すること頗る多し。然るに、アジア人は殆どこれを為す能わず。此の故に中津藩主は夙に意を決して阿蘭陀語を学べり。洋書を読み、有益合理なる技術を検出し、以てその数多の家臣をして明敏有能ならしめんが為なり。

下記署名の者、一昨年来、公儀の命により江府にあり。或る時、上記の侯より、求められたり。容易に阿蘭陀語を学ぶ手段を發明すべしと。公務繁忙のため暇無しと雖も、侯の好学の志を大いに悦びて、記憶せる語すべてを侯の家臣神谷弘孝に書き写さしめ、然る後、侯自ら編纂し給えり。本巻の収むる所、爰に見らるる如くなり。

閣下の不断に忠誠なる従者 長崎阿蘭陀通詞 馬場貞由

この序文の末尾の署名は上記のように蘭名ではなく、当時のオランダ通詞仲間の方式によって、姓馬場のローマ字表記に、BaBa の合字を使用し、姓名の順に署名している。Abraham という名前 (voornaam) はオランダ語による日常の会話や手紙に限って用いられたのである。

馬場はまた、昌高の侍医大江春塘 (1787-1844)<sup>(65)</sup> が文政 5 年、ブロムホフ 2 度目の参府の年に江戸で刊行した外来語辞典『バスタールト辞書』(1822)<sup>(66)</sup> の編纂にも協力したが、この宴会の 5 ヶ月後に、病死した。この外来語辞典はメイエル『語彙宝函』第 6 版 (Lodewijk Meijer, *Woordenschat*. Hendrik Boom, Amsterdam, 1688) の第 1 部『外来語』篇をもとに編纂した蘭日辞典である。刊行者の大江春塘は本書の蘭文標題紙には下記のように、ローマ字表記で印刷されている。下線部は蘭書のリユブリケーションにならって印刷した朱字を示す。ちなみに、大江春塘は後述のように、オランダ人から蘭名を与えられた形跡がない。

NIEUWE-GEDRUCT / BASTAARDT / WOORDEN-BOEK. / DOOR  
/ OOYE SUNTOO. / LEEFARTS VAN / DEN LANDSHEER / NA-  
KATS, / (fig.) / T' JEDO. / 1822. /<sup>(67)</sup> (バスタールト辞書 中津藩主  
侍医 大江春塘新刊 江戸 1822年)

巻頭には昌高がオランダ語の序文を寄せている。香川大学神原文庫蔵本によって、これを翻刻し、和訳を付けよう。同一パラグラフ内の改行は／で示した。末尾の署名部分は／を使用せず、原文の改行をそのまま示した。

[1 オ]

Voorrede

Trouwens de Eene plant de / Boom en de Andere Eet 'er de /  
vruchten van; — als de / Eene één boek, in gemeen ge., / "maakt heb-  
be, Zou 'er ieder ande., / "ren gemakkelijk van verkrijgen. / Wat 't boek  
van Bastaardt woor., / "den belangt, in Holland en an., / "dere waareld  
deer van Europ., / "pa, Men heeft 't reeds gemeen / gemaakt, maar bij

ons tot nog / toe 't niet; daar door bij ons / van ieder Landgenooten het  
/ niet kunnen magtig Worden, / [1 ウ] schoon de zommigen Zijn, die  
't / welke van waar hier overgebre., / "kt houden. ik zal waar uit / 't  
voor beelden Geven, als men / hier te Land alleen den Boom / aan Zien  
kan, en van Zijn vru., / "cht nog niet in den hand nee., / men kan.

't is waarschijnlijk, dat, / als men een Horlogie te maa., / "ken wilt,  
zo de verscheidene / werk tuigen nooden zou. waar / onder zal men sta-  
al-messen / vijls, passels, en Hamelties en / enz. voor een zeer Noodza-  
kelij., / [2 オ] "ker houden, als de Andere. / niet waar? Uit dien hoofde  
/ om ook de hollandsche Boeken / te leeren en dezelve taal te ver., /  
"staan, moet men de allerhande / woorden boeken van nooden heeft, / in  
zonderheid die van de Bastaar., / "de woorden zo genoodig houden, / als  
gemelde werktuigen.

Wijl de mijn aart een / liefhebber der Europeese zaaken, / en Een  
leer Zugt der Holland., / "sche boeken is, heb ik ook veele / Evenzinnige  
dienaar daar zijn / 'er van de twee voornaamste. / [2 ウ] de een heet  
Kamija Filojosi en / de andere is doctoer ooije zun., / "too genoemd. de  
eerste heeft in / anno 1810. over mijn verzame., / "lde jappansche en  
Hollandsche / woordenboek, van zijn dagen / in ruste door, met groote  
moei., / "te gedrukt.

de Tweede heeft nu 't boek / van Bastaard woorden, met / zeer  
veel moeite gedrukt, dit / werk is het zelfs, en dit is / door de Corri-  
geeren van den BBa / Sadajosi volmaakt gezuivert. / Daar van ik ver-  
blijde, / [3 オ] dat, de voorgemelde doctor in onze / Tuin een groot  
boom plantende, / en de welke de vruchten hand over / hand voort  
brengen zal, die / zeer aangename, gezonde, en / tot Eeuwig bewaar-  
baar zij, / En, dewelke tot Eet van onze / Jappansche landgenooten  
strek., / "ken Zal.

Geschrijven

door

Minamoto Masataka



vorst van 't landschap  
te Jedo Nakats.  
A<sup>o</sup> 1822,

(和訳)

序文

げに人、木を植ゆれば、他の人、その実を食す。これと同じく、人、書を著したれば、他の人、各々その書を得ること易し。バスタールト辞書なる書に就きては、オランダ及びヨーロッパ各地に於て既に流布したり。然れども我が国にては今日に至るまでしからず。これがため、我が国に於ては、此の地に齎されたるを蔵する者ありと雖も、同胞皆は、得る能わず。されば、もし、この国にただ木を眺むるのみにして、その実を未だ手に取る能わざるものあらば、我、範を示さん。

人、時計を作らんと欲せば、種々なる道具を要するは、まことに真に近からん。就中、刃物、鑢、コムパス、小槌等の、他にもまして、欠くべからざるは、真ならざるや。此の故に、阿蘭陀語の書を読み、此の語を解するがためには、あらゆる辞書を必要とするも、殊にバスタールト辞書の必須なるは上記の諸道具の如し。

我、素より、西洋文物の愛好者にして蘭書を愛読するも、また同好の臣も多くして、主たる者二人あり。一人は神谷弘孝と言ひ、他の一人は医師大江春塘と言う。前者は千八百十年、その余暇を費やして我の編せる日蘭辞書を一大苦心を以て刊行せり。

第二の者、今や、非常なる労苦を以てバスタールト辞書を印刷せり。本書、それなり。また、馬場貞由の校正により誤りを正して完成せり。此の故に、我悦べり。前言せる医師、我等が庭園に一本の大木を植えたれば、その実を人の手から手へ齎す。その実、いと美味にして、滋養に富み、長く保存に耐うべし。かくして我が日本国の同胞の食に達すべし、と。

中津藩主 源昌高

於江戸 千八百二十二年 誌す

この序文における果樹の比喩は、原書標題紙のボーム書店のプリンターズ

マークにヒントを得たものかもしれない<sup>(68)</sup>。昌高のこのオランダ語序文末尾の署名は『蘭語訳撰』の標題紙と同様に本名のローマ字表記となっている。昌高は文政8年5月6日(1825年6月21日)に家督を次男の昌暢に譲り隠居したので、隠居後の地位を示すオランダ語は、vorst(藩主)から landheer(公)に変わる。

昌高が蘭名でサインをした蘭文としては、古く斎藤阿具が紹介したドゥーフ家所蔵のドーフ宛贈り物の添え状に、「Jedo den 27 Zitsiquats 1826 / Uw ed Vrind / F. Hendrik / Landsch Heer van Nakats」(1826年7月27日 江戸 貴下の友人 中津公 F.ヘンドリック)とある例<sup>(69)</sup>、またドゥーフからヘンドリック・ファン・デン・ベルグ(Hendrik van den Berg)の蘭名をもらった下関のオランダ宿の主人伊藤盛永に宛てた、文政3年の蘭文詩が知られる。その末尾は「Boenseij / 3<sup>de</sup> jaar Geschreven / door / den vorst en kasteel eigenaar / van Nakats in 't landschap / Boezen / Frederik Hendrik」(豊前中津藩主にして城主 フレデリック・ヘンドリック 文政3年誌)という<sup>(70)</sup>。

1882年の古い報告ではあるが、当時のライデン国立民族学博物館長リンドール・セリュリエルは、昌高の蘭文名刺(visitekaartje)とともに、昌高の蘭名サインがある次のような賀状(gelukwensch)を所蔵していると述べている<sup>(71)</sup>。セリュリエルは商館長スチュルレル文書を所蔵していたので、この賀状もスチュルレル宛かもしれない。末尾の「Aangewezen」(指示された、の意)は昌高の書き誤りで、正しくは Gewezen(前の)である。「vrijheer van vierd klasse」(4級男爵、の意)は昌高の位階「従四位下」の蘭訳であろう。

Leeft Lang zonder paalen met vreugd  
en volkomen gezondheid.

Jedo den 10 April 1826

geschrijven door

FR. HENDRIK.

Aangewezen Prins van Nakats, nu vrijheer van vierd klasse.

(歓喜を以て無限の御長寿を また全き御健康を 1826年4月10日 江戸 前中津藩主 現四位 Fr.ヘンドリック)

## アルブランド

画面手前中央に座るアルブランド（Albrand）というオランダ名を持つ日本人は脇差しを傍らに置いており、町人ではなく役人であろう。馬場佐十郎が広島でオランダ人から Abraham と呼ばれていたというドゥーフの証言から類推して、Albrand はオランダ通詞と思われる。手に持った和紙に書かれた蘭文は、あえて推測すれば「aagenaame roode wijn（心地よき赤ワイン）」かもしれない。

このとき商館長一行に随行したオランダ通詞は、大通詞末永甚左衛門（1768-1835）、小通詞中山作三郎（武徳、1785-1844）、小通詞並茂土岐次郎（生没年不明）の三名だった。作三郎と土岐次郎は商館長ドゥーフの蘭和辞典編纂に協力した<sup>(72)</sup>有能な通詞である。また三人とも文化6年（1809）年に英語とロシア語の稽古を幕府から命ぜられ、ブロムホフ来日後、ブロムホフから英語を習っている<sup>(73)</sup>。この宴会が開催された文政5年、末永は57歳、中山は37歳。茂は年齢不詳である。

ブロムホフはこの参府旅行を準備中の1822年1月17日の日記で、「江戸参府警固役検使・同下検使がほかに大通詞甚左衛門、小通詞作三郎〔中山〕および通詞目付の息子のような、参府旅行に同行する通詞たちとともにやってきた。（そのうち最後の者は、彼の父および義理の父作三郎を喜ばせるために、私の勘定で一緒につれて行くもので、それは私にとっては、なおも砂糖一〇籠の出費となる。）<sup>(74)</sup>」と述べている。すなわち通詞目付茂伝之進の息子土岐次郎はブロムホフの特別の計らいで、その私的通詞として参府に加わったので、この宴席にいた可能性が高い。

ドゥーフは1817年末、帰国に当たって、最初に自分が吉雄権之助らと協力して編纂した蘭和辞典初稿の自筆草稿を「通詞目付の息子」に渡したと、『回想記』に記している。この「息子」は当時小通詞末席であった茂土岐次郎である。フィッセルはその草稿の写本を帰国後、王立オランダ学士院に自著のごとく序文を付けて提出し、アムステルダム学士院会員に任命され、メダルを贈られることになる<sup>(75)</sup>。この写本の一件はフィッセルと茂土岐次郎の親密さをうかがわせる。

茂土岐次郎とブロムホフおよびフィッセルとのこうした関係から、この絵に描かれた Albrand は風采からすると若くは見えないが、茂土岐次郎と推定し

てもよいだろう。Albrand の名は、1797年からアムステルダム劇場 (Schouwburg Amsterdam) でロングランを続けていたコッツェビュー (August von Kotzebue) 原作『誹謗者』(De Lasteraar) という芝居<sup>(76)</sup>に登場する大臣秘書 (geheim-secretaris) の名前であり、フィッセルなど出島の芝居好きのオランダ人が名付け親かもしれない。

### 第3節 オランダ名の大流行

出島でオランダ人からアブラハムと呼ばれていた有能なオランダ通詞馬場佐十郎が文化5年(1808)に江戸に呼ばれ幕府天文方の翻訳官として活躍を始め以来、江戸の蘭学者やオランダ趣味の大名、その家臣、あるいは伊勢屋七兵衛のような商人の間で、オランダ名を参府した商館長からもらって、オランダ語で文通し合ったり、オランダ人とオランダ語で会話や文通をすることが流行した。

#### ブロムホフの大槻玄沢宛書簡

ブロムホフが1819年12月16日(文政2年10月29日)付で出島から江戸の大槻玄沢宛に出した書簡をみると、前年の初回の江戸滞在以来、ブロムホフが玄沢と親しく文通していたことが分かる。そこには、Botanicus(桂川甫賢)、Stolp(神谷弘孝)、Abraham(馬場佐十郎)の他に、スヒュルプ(Schulp)、ダップル(Dapper)の名もみえる。Dapperは前年、ブロムホフからヤン・ヘンドリック・ダップル(Jan Hendrik Dapper)の名をもらった下総古河藩士鷹見十郎左衛門(泉石)である。Schulpは未詳。末尾にみえるエンゲレン(Engelen)は筆者頭のヘンドリック・ヘラルト・エンゲレン(Hendrik Gerard Engelen)、ハーヘン(Hagen)は医官(Officier van Gezondheid)のヘリット・レーンデルト・ハーヘン(Gerrit Leendert Hagen)である。

Decima Decbr 16. 1819.  
WelEdele Heer & Vriend!

UwED vriendschappelijke Letteren van den 22.<sup>ste</sup> Sanquats heb ik wel ontvangen, groot aangenaam was het voor mij te hooren UwEd nog wel-

varende zijt, en het gesonde dit voorjaar bij UwEd ontvangen is, gelijk ik de Presentjes van UwEd, ook wel ontvangen heb waar voor groot dankbaar.

als de Heer Sensajmon in Jedo Komt, zal ZE: UwEd: terhand stellen Een fles Liqueur, tot aandenken, en met de overige Heeren als Botanicus, Stolp, Schulp, Dapper, en Abraham, gesamentlijk twee potjes confituur, omte verdeelen.

Ik hoop in twee jaaren weeder in Jedo te zijn als alle zaaken goed geschikt worden, dat ik hoop! en dan met UwEd spreken. Engelen en Hagen Zijn na Batavia vertrokken, dus goede rijs;

Leef gelukkig en Gezond, en geloof mij te zijn Na vriendelijke Groeten

WelEdel Heer!

UwED dienst [willige] Vriend

Ridder J: Cock Blomhoff.<sup>(77)</sup>

1819年12月16日 出島にて

貴兄へ、友よ

3月22日付、友情のこもった貴翰を確かに受け取りました。貴兄、益々お元気にお過ごしになり、今春お送りした書状も御落手されたと伺い、欣快に存じます。同様に私も貴兄の贈り物を確かに落手致し、誠に有り難く存じます。

尊兄には、センザエモン〔仙左衛門か〕氏が江戸に到着致しましたら、お土産のリキュール1瓶をお受け取りになられますように。また、小さな壺2箇分の砂糖漬け菓子は他の皆様、ボタニクス、ストルプ、スヒュルプ、ダップル、アブラハムなどとご一緒に、お分けになつてください。

万事順調に運びますれば、2年後には是非とも、再び江戸に参上致したく存じます。その節は貴兄とお話し出来ますよう、願っております。エンゲレンとハーヘンはバタヴィアへ出発しましたので、道中無事でありますよう。

御多幸、御健康に過ごされますよう。

尊兄には、親しい挨拶の後も、私が貴兄の忠実なる友人でありますこと、信じて下さいますよう。

騎士 J. コック・ブロムホフ

ブロムホフは1822年（文政5）、二度目の江戸滞在中、4月9日（旧暦2月18）日の日記に、中津藩主奥平昌高から求められて、その息子、二人の夫人、医師一人を含む家臣三人にオランダ名を付けた。オランダ名が「当地では大流行（rage）となっている」<sup>(78)</sup>と書き記している。甫賢の「長崎屋宴会図」にはこの大流行の花形であった3人の蘭学者が登場している。昌高が企画した『蘭語訳撰』と『バスタールト辞書』はこの大流行に応えるべく編纂発行されたといっても過言ではない。

### 日本人のオランダ名表

化政期のオランダ語ブームを象徴するオランダ名の大流行は、蘭学史研究において早くから注目されてきた。なかでも板沢武雄は1933年に、この現象を「蘭学の国民生活に浸潤した程度に至っては非常なもので、いわゆる蘭癖と称すべき類」の一例として否定的にとりあげ、「ホフマン博士の著書に蒐録せられたるもの」によって日本名、オランダ名、命名者（命名時期を含む）の対照表を発表した<sup>(79)</sup>。この表には36のオランダ名が列挙されている。命名者別にその内訳を示せば、「ゾーフ」（Doeff：7）、「ツルリング」（Tullingh：1）、「ブロムホフ」（Blomhoff：17）、「スツルレル」（Sturler：11）となる。ブロムホフが「大流行」というのもっともな数字である。

板沢が典拠として挙げた「ホフマン博士の著書」は不適切な表現であった<sup>(80)</sup>。実際には『オランダ言語民族学紀要』1882年1月号（*Bijdragen tot taal- en volkenkunde*. Jan. 1882）に掲載された、「R. セリュリエル氏校訂・故 J.J. ホフマン博士解題『在日オランダ領事官 J.H. ドンケル・クルチウス1858年江戸旅行の節本国のために購入せる日本書コレクション』」（*Verzameling van Japansche boekwerken, door Mr. J.H. Donker Curtius, Nederlandsch Commisaris in Japan, op zijne reis naar Yedo in 1858 voor het rijk ingekocht. Beschreven door wijlen Dr. J.J. Hoffmann, en uitgegeven door Mr. R. Serrurier.*）の末尾に、ホフマンの弟子で、当時ライデンの国立民族学博物館館長であつ



た校訂者セリュリエル (Rindor Serruier, 1846-1901) が書き加えた「付説」(Naschrift)<sup>(81)</sup>である。セリュリエルはその112-114頁に、自分所蔵の商館長スチュルレルの稿本 HOLLANDSCHE NAAMLIJST VAN JAPANDERS (日本人のオランダ名表) を翻刻掲載したのであった。板沢が利用したのはこのスチュルレル作成の表であった。

この表は日本名 (Japansche Namen)、オランダ名 (Hollandsche Namen)、身分 (Qualiteit)、公邸または居住地 (Residentie of Woonplaats)、命名者 (Door wien genoemd) の対照表である。これによれば、従来、中津藩医大江春塘に比定されてきた Jacobus Paracelsus のオランダ名はブロムホフが江戸滞在中の1822年4月3日に Doctor van dito (=Fredrik Hendrik Landsheer van Nakatsoe) すなわち中津藩医の Ooije Goensij (オオエ・グンセイ) に与えたものとなっている。このオオエ・グンセイは大江春塘ではなく、中津鷹匠町大江家第4代大江元泉 (範古)<sup>(82)</sup>に比定できる。

また、スチュルレルは Abraham を表の7番目に挙げ、ドゥーフが1806年に、Keizerlijk Dienaar bij de Astronomisten (幕府天文方出仕) で江戸在住の Baba Sasioura (馬場佐十郎) に与えたものとしているが、佐十郎の出府以前に、出島のオランダ人が佐十郎に与えていたオランダ名というドゥーフの証言の方が真実であろう。

1806年、京都滞在中にドゥーフから Frederik van Gulpen のオランダ名をもらった伊勢屋七兵衛は、この表では1番目の日本名 Ookfboe Daira Daisin no Daiboe (奥平大膳大夫)、オランダ名 Fredrik Hendrik、身分 Landsheer van Nakatsoe in 't landschap Boezen (豊前国中津藩主) の奥平昌高、2番名の日本名 Katsoera Gawa Hoken (桂川甫賢)、オランダ名 Willem Botanikus、身分 Doctor van den Keizer (将軍侍医)、3番目の日本名 Camija Ginnai (神谷源内)、オランダ名 Pieter van der Stolp、身分 Dienaar van voormelden Landsheer (前掲の藩主の家臣)、4番目の日本名 Takami Jioro Saijemon (鷹見十郎左衛門)、オランダ名 Jan Hendrik Dapper、身分 Dienaar van Landsheer Toij Oije no Camie 1 e Rijksraad (老中首座藩主土井大炊頭)、すなわち、奥平昌高とならぶいわゆる蘭癖大名、古河藩主土井利位の家臣鷹見泉石、に続いて、5番目に、日本名 Igea Fio Sioeke (伊勢屋兵助)、オランダ名 Fredrik van Gulpen、身分 Koopman (商人) として登場する。

### 第3章 仮装宴会の企画と演出

#### 第1節 企画者

「長崎屋宴会図」画面右の中央には長崎屋の主人ゲンエモン（Genymon、すなわち江原源右衛門）が座る。その背後の女性「Vrouw van Genzabro」（ゲンザブロウの妻）、源右衛門の前で給仕をしている女性「Zuster van Genzabro」（ゲンザブロウの妹）、画面右下の「Kaseya Tamesito」（カセヤ・タメシト、カサヤ・タメヒトか）、いずれもどのような人物か未詳である。

仮装宴会の実際の主催側として描かれているのは、畳にじかに座っている以上4人の日本人と思われる。和装のプロムホフとフィッセルがホスト役、椅子を使っている洋装の馬場、甫賢、神谷が招客という見立てである。フィッセルの参府紀行によれば、このように主客転倒した仮装宴会は、参府に随行した長崎奉行所検使と長崎屋主人源右衛門が相談して、商館長一行に江戸の豪華な暮らしと礼儀作法（*étiquette*）を教えようと、費用を惜しまずに工夫した結果という。こうした役回りに、芝居好きのフィッセルは大満足であったにちがいないが、洋装のチグハグには苦笑したようだ。フィッセルは回想する。

御検使と宿の主人は、特別に立派な宴会を催してわれわれを饗応してくれたが、江戸の豪華さと礼儀作法との概念を伝えんものと、費用の点でも、その心配りにおいても、いささかも惜しむところがなかったのである。いわゆるオランダの友人たちの多くは、このような機会にはオランダの服を着用して姿を現したが、これらの衣服は、昔から時間をかけて徐々に集められたものであり、それらを組合わせて着用するときは、全体としては、きわめて奇妙なものとなった。（フィッセル『日本風俗備考』2、庄司三男・沼田次郎訳注、平凡社、東洋文庫、242頁）

しかし、芝居好きのフィッセルが西洋喜劇で頻繁に用いられる主客転倒と仮装という演出技法を知らないはずはない。フィッセルが着想し提案したことも十分考えられる。すくなくとも、「長崎屋宴会図」の作者、桂川甫賢は家伝のオランダ服を提供するなど、企画・演出に深く関わったはずである。

## 第2節 描かれた洋装

### 洋装の概要

「長崎屋宴会図」に描かれた人物10名の服装で、もっとも精彩を放っているのは、洋装の蘭学者3人(図16)の中央にいる、この図の作者桂川甫賢自身であるとは誰もが認めるであろう。

甫賢の服装の概要をまとめると、三角帽をかぶり、刺繍飾りのある濃紺のヴェストの上に、やはり刺繍飾りのある赤いロック (rok、コート) を着ている。ロックは腰下にスリットがあり、裾の先が椅子の両腿の間からのぞいている。胸元でロックの襟のように見えるのはヴェストの襟であろう。首はしっかりと白い襟巻を巻き、胸元はジャボ (jabot) のようだ。ロックの前腕部は大きな草模様の刺繍があり、両袖口は白いレースのフリルが付いている。縦縞のある緑色の半ズボン (kniebroek、ニッカーボッカー) と刺繍模様付の白い長靴下 (lange kousen) に、屋内用のピンクの上履き (オランダ語名称不明) をはいている。

甫賢の左右にいる馬場佐十郎と神谷源内の洋装は、基本的に甫賢と同じだが、帽子は甫賢の時代遅れの三角帽ではなく、二人とも、新しい流行の山高帽をかぶり、ともに、帽子の右側面に鳥の羽を差している。羽は蘭学者が所有をきそっていた駝鳥の羽であろう。二人の長靴下に刺繍はない。また神谷の濃い茶色の短靴には足の甲の部分にリボンが認められる。

このように甫賢が細密な洋装を描き出すことが出来たのは、森島中良が『紅毛雑話』の付録「紅毛服飾之図」で図入りで解説したような桂川家収蔵品を、実際にこの文政5年(1822)の宴会で着用したからにちがいない。その実物を見ながら、この宴会図に書き込んだはずである。そこで、「長崎屋宴会図」の洋装と関連する箇所を若干取り出して、「紅毛服飾之図」を両者を比較しよう。以下、本節の引用は断らないかぎり、「紅毛服飾之図」による。

### ロック

蘭学者3人がともに着用しているロック (rok)、ヴェスト (vest)、半ズボン、長靴下、短靴は「紅毛服飾之図」の口絵(図17)に描かれた三角帽のオランダ人図と基本的に同じである。この口絵のオランダ人の足首にはしっかりとヴェスプ (vesp) が描かれている。



図16 長崎屋宴会図に描かれた蘭学者

衣服「ケレイド」衣服の惣称なり

上着を「ロック」下着を「カミソール」といふ。上着は長く、下着は甚短し。裾の方に物を入れる所あり。毛織、糸織、おのゝ好にまかせて製す。但し礼式の服はことゝく俱裁<sup>ともざれ</sup>にて作るなり。鈕鈎<sup>ほたん</sup>は金銀の金具にて卷たるものなり。其製一ならず。蛮名「コノープ」といふ。衣服の俱裁にて包みたるもあり。服の制度は貴賤の差別なきやうなり。

「ケレイド」「カミソール」「コノープ」はそれぞれ、kleed、kamizool、knoop に対応する。kamizool はヴェスト (vest) ともいう。図に描かれた「カミソール」は袖付きのヴェストである。袖なしのヴェスト (mouwloze vest) もある。

### 三角帽

甫賢がかぶっている三角帽はツバに縁取りがあることも含めて、この口絵のものと同形である。本文第1図(図19)には次の説明がある。



図17 紅毛服飾之図 口絵

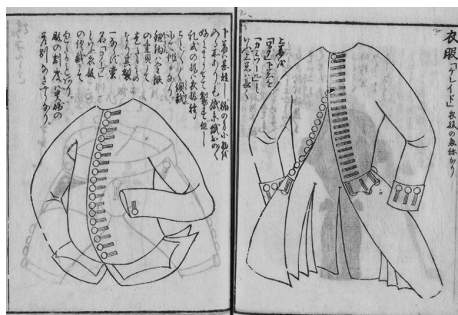


図18 紅毛服飾之図 衣服

かき 氈笠 蛮名「ウート」

「ベイフル」といふ獣の毛にて造る。黒、白、<sup>ちやいろ</sup>褐色の物あり。緑は金銀の<sup>さざへり</sup>笹縁を懸けたるもあり。又掛ざるもあり。

「ウート」は hoed (帽子) の音訳であり、三角帽は (driehoekige) steek というが、ここではその説明がない。「金銀の笹縁」は甫賢の三角帽にあてはまる。「ベイフル」は bever (ビーバー) をさす。ここでは、bevervilt (ビーバーの毛皮でできたフェルト製であることを説明している。

桂川家所蔵の三角帽と密接な関係があると思われる資料に、林子平が『海国兵談』出版費用を得るため、作成頒布したといわれる「阿蘭陀人宴会図」がある。ほとんどが摺り物として流布したため、細部に異同があり、衣服の形態、輪郭が不鮮明なものが多い。香川大学神原文庫の『蘭人遊宴の板画』(図20、軸装) もそのひとつである。この摺り物の題には「奥州仙台之奇傑林子平先生自画自刻異国人晩餐会之図」とある。

しかし、もっとも信頼度の高いものは、林子平自筆とされる C.R. ボクサー旧蔵「阿蘭陀人宴会図」(宮城県図書館蔵、軸装)(図21)である。天明2年(1782)秋、三度目の長崎訪問時に子平が出島オランダ商館の晩餐場面を描いたとされる彩色画である。筆者が2003年にアムステルダムの古書店で実物を調査し、幸いに日本に里帰りすることができた<sup>(83)</sup>。



図19 紅毛服飾之図 氈笠 (かさ)



図20 蘭人遊宴の板画 香川大学神原文庫蔵

その調査の時点で自筆説について一抹の不安がよぎった。今回、桂川甫賢自筆の「長崎屋宴会図」が出現するにいたって、この子平図は子平が桂川家のサロンに出入りし、森島中良と親交をもったこと<sup>(84)</sup>も考え合わせると、子平図の成立に森島中良が深く関与したのではないかと、という説に傾いている。というのも、子平図は出島蘭館の食事風景というよりは、フォリオ版の『オランダ連合州・東西インド会社略史』*Histoire abrégée des Provinces-Unies de Pais-Bas*. Amsterdam, Jean Malherbe, 1701. (個人蔵)の銅版折込図版に描かれたインド会社の各支部幹部の会合図、たとえば、アムステルダム支部の図(図22)などにヒントを得て、桂川家所蔵の三角帽やオランダの衣服を「阿蘭陀人宴会図」に描き込んだ、子平と中良の合作ではないかと思われるからである。

このボクサー旧蔵「阿蘭陀人宴会図」は、食事中的5人のオランダ人全員が三角帽を持っていることが精密に描き分けられている。すなわち、奥の左側と手前の右側の2人が三角帽をかぶったままである。奥の右側、東インド会社 Hoorn 支部の略字 H が刻まれた椅子に座るオランダ人は左手に、画面右端のオランダ人は右手に、三角帽を持っている。手前左側の VOC マークのある椅子に座るオランダ人は左脇に三角帽を挟んでいる。甫賢が文政5年の仮装宴会でかぶった三角帽は、天明2年に子平図に描かれたものと同じ物かもしれない。





図21 阿蘭陀人宴会図 伝林子平筆 C.R. ボクサー旧蔵 宮城県図書館蔵



図22 Histoire abrégée des Provinces-Unies de Païs-Bas. 1701. 個人蔵



## 襟巻

蘭学者3人とも白い襟巻（das）をしっかりと首に巻いている。

ありまき  
風領「ダス」

白き西洋布<sup>かなきん</sup>を以て製す。一幅の両端を芥子<sup>くいり</sup>鉾にくゝり、金具にてしむるやうに作る。顔色の赤くなる程つよくしむるなり。

## 半ズボン

はかま  
袴「ブルーク」

地合は定まりたる事なし。目の方に鈕鈎をはつして物を入れる所あり。其内に又口ありて、物を入れる様に作る。後の紐および膝の下の紐に金物ありてしむるやうにす。その金物を「ゲスプル」といふ。下に図あり。



図23 紅毛服飾之図 袴

図（図23）は「ブルーク」（broek）と名付けているが、3人の蘭学者のはくものと同じ半ズボン（kniebroek）の図解である。内部構造を詳しく図示するために脚部を短くしたようだ。「ヘスプル」は「ヘスプ」（gesp）の誤り。長崎屋で耳から説明を聞いたことがうかがわれる。この説明で、靴だけではなく、広く衣服に使用する留め金をさしたことが分かる。

## 下着

「長崎屋宴会図」の洋装図からは下着の様子は分からない。3人の蘭学者も図解（図24）にあるような下着を着けたにちがいない。「ヘムト」「オンドルブルーク」はそれぞれ、hemd、ondrebroekの音訳。

はだき  
襯「ヘムト」

白き西洋布にて作る

たみさき  
褌「オンドルブルーク」

上におなじ

### 長靴下

馬場佐十郎、桂川甫賢、神谷源内、3人の膝下から爪先まで（図26）をよく見ると、甫賢とがはいている長靴下は、まさに紅毛服飾之図に図示されたもの（図25）と同様のよく似た刺繍が施されている。同じ長靴下の可能性もある。「コウス」は kous（ストッキング）の音訳である。



図24 紅毛服飾之図 襪 褲

メリヤス

莫大小「コウス」

股引なり。木綿糸、絹糸、毛糸にて編む。色糸にて模様を編入たるもあり

### 屋内用短靴と上履き

馬場佐十郎、桂川甫賢、神谷源内は3人とも、踵（かかと）の露出した屋内用短靴（mul）ではなく、踵から爪先まですっぽりと包む柔らかそうな上履きをはいている。紅毛服飾之図の襪（たび）図（図27）にみえるタイプに似ているが、上履きを固定する紐あるいは帯が認められない。

くつ  
履「モイル」

底は革なり。上の方は天鵞絨<sup>びろうど</sup>にて張。金銀の金具にて模様を置く。又革にて張たるもあり。一チやうならず。

たび  
襪「ターピス」

裁にて作る。紐をしむる金具を「ゲスブル」といふ。下に図あり。

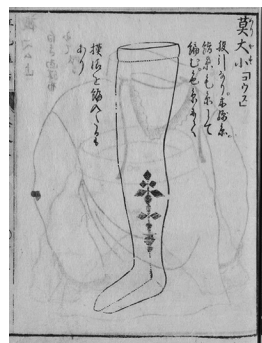


図25 紅毛服飾之図 莫大小

「ターピス」はここではフランス語 tabis

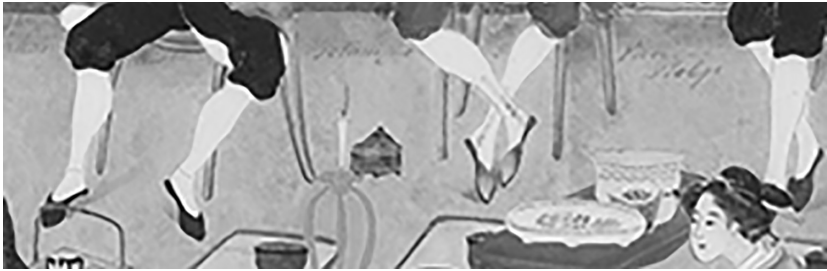


図26 長崎屋宴会図 蘭学者の履き物

[tabi] からの借用語 tabis を、オランダ語式に語末の子音を加えて「タービス」と発音したものを誤って「ターピス」と表記したものであろう。波模様のきめ細かい絹布の名称で、オランダ語ではこれをタベイン (tabijn) という。桂川甫周が長崎屋で説明を受けたとき、素材名の tabis と上履きの

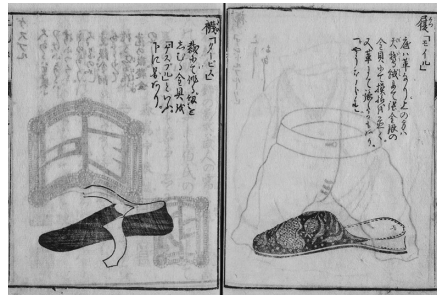


図27 紅毛服飾之図 履 襪

名称とを取り違えたものであろう。オランダ人が長崎屋でこのタイプの上履きの説明を桂川甫周にした際、どのようなオランダ語名称を与えたのか未詳である。桂川家では「タービス」の誤称が定着したと思われる。なお、古賀十二郎『外来語集覧』(2000、長崎文献社) 453-454頁は、「タビイ」項目で、『唐商売往来』(不明) の「二彩」を引き、これをポルトガル語源とする。

## 水煙管

桂川甫賢は図28に見えるように、右手に水煙管 (waterpijp)、左手にピンクのハンカチ (zakdoek) を持っている。その水煙管は隣の神谷源内 (弘孝) が右手にしっかりと握り、差し出している水煙管と比べるとサイズはやや小さいが、同型らしい。神谷の持っている水煙管の瓢箪型の小壺ははっきりと磁器と分かる。中国製のようなだ。

大概玄沢『蔦録』(文化6年1809) 卷之中 (29オ) が図解する「安南水煙管」



図28 長崎屋宴会図（部分）



図29 めさまし草 清朝人喫煙図<sup>(85)</sup>

国立国会図書館ウェブサイトより

は原理は同じだが、形態も材質（金属）も異なる。『蔦録』を一般読者向きに抜粋した清中亭淑親編『目さまし草』（文化12年1815）の「清朝人喫煙図」（図29）に「竹煙管を把ハ下官なり」と説明のある「竹煙管」に形態も材質（竹・陶製）もよく似ている。

## おわりに 一長崎屋宴会図の由来一

本図発見を知らせて下さった Forum Rare Books 店主によると、直前の所蔵者は30年ほど前に入手したようだが、それ以外の詳しい由来は不明とのことであった。しかし、桂川甫賢自筆のオランダ語の説明と蘭名サインおよび「国寧」の朱印がある以上、甫賢が商館長ブロムホフにこれを贈った可能性が高い。ライデン国立民族学博物館所蔵ブロムホフ・コレクションに関するマティー・フォラー（Matthi Forrer）氏の英語論文によって、ブロムホフが1825年にオランダ王立珍品陳列館に寄贈した分とは別に、最期まで手許に置いていた日本関係資料は1907年に子孫が売りに出し、同年11月12日にアムステルダム美術商デ・フリース（R.W.P.de Vries）が競売に掛けたこと、そのブロムホフ旧蔵コレクション売立目録（図30）<sup>(86)</sup>に甫賢筆彩色図の記載があることを知った。

同目録のブロムホフ遺愛品68点のフランス語記載はフォーラー氏の同論文中に付録 (Annex) として、その概要が英訳されている。また、フォーラー邦子氏による同論文の邦訳もある<sup>(87)</sup>。フォーラー氏のご協力により、当該の11番甫賢筆彩色図に関するフランス語記載文の写真 (図31) を得た。

同目録の10番は「ブロムホフ家族および使用人の肖像図 絹本 無署名 高さ90cm 幅165cm (非展開)」(10 PORTRAITS DE LA FAMILLE COCK BLOMHOFF et leur personnel. Peinture sur soie anonyme. h.90 l. 165

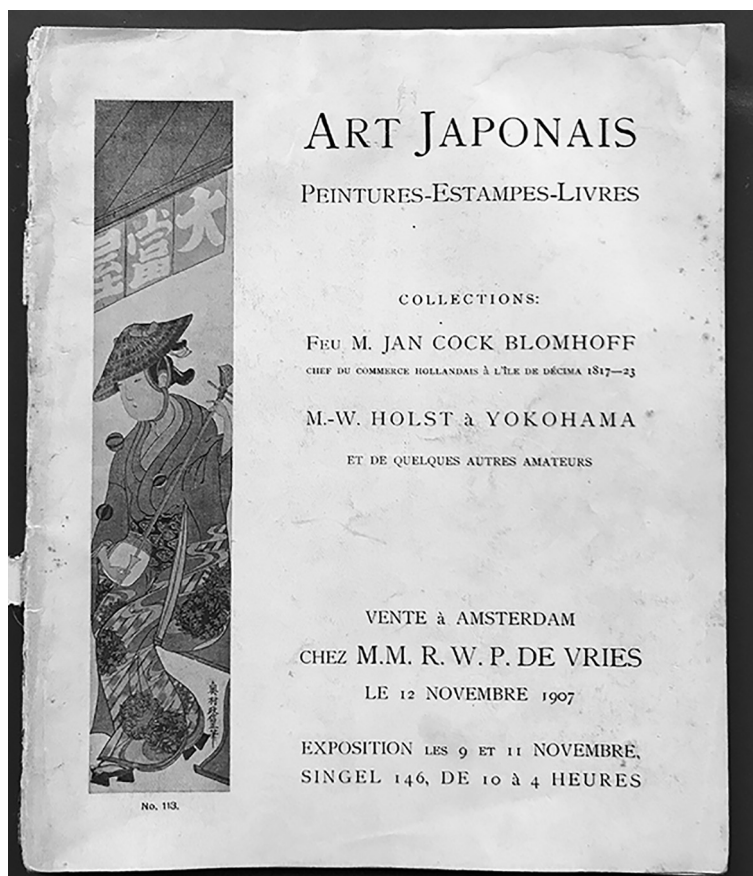


図30 1907年デ・フリース売立目録の表紙 Photo Courtesy Matthi Forrer

11 **UNE VISITE** chez le gouverneur japonais de Décima. On remarque trois hollandais M.M. Abraham, Botanicus et Van der Stolp et sept personnages japonais. Dessin en couleurs par W. Botanicus. 1822, h. 28, l. 33 cM.

12 **THÉÂTRE HOLLANDAIS À DÉCIMA.** Suite d'un frontispice et de six dessins en couleurs représentant des scènes de la société d'amateurs dramatiques de la colonie hollandaise à Décima (Nagasaki). Trois des dessins représentent des scènes dans une chambre, tandis que les trois autres sont des vues de forêt. Les dessins sont très intéressants pour le costume européen d'environ 1820 et en général pour la vie de colonie. Exécutés par **Toyosouki**. H. 24, l. 37 cM.

Ajouté: un inventaire en hollandais du théâtre, vérifié en 1822 par M. F. W. van Overmeer Fischer. Le théâtre portait le nom „Ars longa, vita brevis”.

図31 1907年デ・フリース売立目録 ブロムホフ旧蔵11番・12番の記載 (pp. 8-9 部分) Photo Courtesy Matthi Forrer

cM. (non-tendu) ) の解説である。

また、12番は「トヨスキ」(Toyosouki、登与助すなわち川原慶賀) 筆「出島の阿蘭陀劇場図」(12 THÉÂTRE HOLLANDAIS À DÉCIMA.) すなわち素人芝居図7枚(口絵1枚、舞台場面図6枚)の解説である。

上掲の11番と12番のフランス語記載文(図31)を訳せば、次のようになる。

11 出島の日本人領事宅への**訪問**。オランダ人男性アブラハム、ボタニクス、ファン・デル・ストルプの3名と日本人7人が見える。W. ボタニクスによる彩色図。1822年。高28cm、幅33cm。

12 **出島のオランダ芝居**。口絵1枚と出島(長崎)のオランダ同胞の演劇愛好家一座による芝居の場面を描いた6枚の彩色図の続き物。図のうち3枚は室内の場面を表すのに対し、他の3枚は森の風景である。これらの図は1820年頃の西洋の服装、および海外同胞の生活を知うえで、大変興味深い。**トヨスキ**作。高24cm、幅37cm。

追加。芝居出し物のオランダ語による明細書。1822年に F.W. ファ



ン・オーフルメール・フィッセル氏によって検認されたもの。芝居一座は *Ars longa, vita brevis*（芸術は長く命は短し）の名を掲げていた。

11番の記載を「長崎屋宴会図」と照合すると、「W. ボタニクスによる彩色図。1822年。」および蘭名「アブラハム、ボタニクス、ファン・デル・ストルプ」は一致する。蘭名の記載順序と絵のなかの位置（左から右へ）も一致する。描かれた人物の数については、目録記載者が洋装して蘭名をもつ日本人（蘭学者）3名をオランダ人男性と誤解し、和装のオランダ人2名（プロムホフとフィッセル）をオランダ語の添え書きにもかかわらず日本人と早合点し、他の日本人5人と合わせて、「日本人7人」としたとすれば、合理的かつ説得的である。

「出島の日本人領事宅への訪問」（UNE VISITE chez le gouverneur japonais de Décima）というタイトルは記載者がオランダ語を解さず、日本事情に疎いため、オランダ人3名が出島の日本人領事宅を訪問した場面、と想像して付けたものにちがいない。最後に、「長崎屋宴会図」の彩色図部分の寸法は、高さ23.2cm、横幅33cmである。これに対し、売立目録では高さ28cm、横幅33cmと記載され、横幅は一致しているが、高さが異なる。寸法以外はすべて一致するので、目録の28cmは23cmの印刷ミスと判断できる。

以上を総合すれば、「出島宴会図」はこの売立目録の記載する11番「出島の日本人領事宅への訪問」に他ならない。プロムホフが「出島宴会図」を最期まで、10番「プロムホフ家族および使用人の肖像図」、12番「出島のオランダ芝居」図とともに愛蔵していたことは明らかである。

10番「プロムホフ家族および使用人の肖像図」のフランス語記載文は原図の特徴をよく伝えていられるので、以下に全文を翻訳する。記載者は当時の情報不足から、制作年時を1816年、制作地をバタヴィアと推定している。下線部（訳者）は川原慶賀筆『プロムホフ家族図』衝立（1817、神戸市立博物館蔵）および伝川原慶賀筆『阿蘭陀加比丹并妻子等之図』（東京大学総合図書館蔵）<sup>(88)</sup>と大きく異なる特徴である。フランス語の原語を適宜補った。末尾に「参照」とある、この目録の図版と解説内容との比較検討、本図の現存有無については後考を待ちたい。



10番 **ブロムホフ家族および使用人の肖像図**。絹本着彩。無署名。高90cm、幅165cm（未展開）。

1817-23年出島のオランダ商館長だったコック・ブロンホフ氏は赤い羅紗地で金飾り付きの服を着て、白い長靴下（bas blancs）をはき、鬘（peruque）をかぶった姿で描かれている。オランダ人の女中は帝政様式の服に（en costume empire）に大きな前掛け（tablier）を付けている。夫人のティチア・ベルフスマ（Titia Bergsma）は黒いソファ（canapé）に座り、当時の豪華な服を着て、飾り付きの大きな肩掛け（berthe）をかけ、側には幼い娘がいる。他方、ソファの近くにはジャワ人の召使いが2人立っている。本図は当時を知る上で大変興味深く、しかも薄い絹に実に巧みに作られている。本図は1816年、この家族が日本行きの船を待ってバタヴィアに滞在中に作成されたにちがいない。というのもブロムホフ夫人と女中は日本に入国を認められなかったからである。ブロムホフ夫人は1817年、ハーグで亡くなった。図版参照。<sup>(89)</sup>

12番「出島のオランダ芝居」図は、この記載者が Toyosouki（トヨスキ）とフランス語綴りで表記する日本人の署名をもつことは確かであろう。実際に書き込まれたオランダ綴りの署名は Tojoskij または Tojosoekij（いずれもトヨスケと発音する）であったはずである。現在アムステルダム市公文書館およびアムステルダム大学図書館に分蔵されている無署名の「出島俄芝居図」<sup>(90)</sup>は無署名であり、本図とは認められない。「getekent door Tojoskij te Nagasakij」と書き入れのあるという『蘭館紅毛芝居絵巻物』（黒船館蔵、池長孟旧蔵）<sup>(91)</sup>がこの1907年の売りたて目録に記載された図そのものか、あるいは密接な関係があると推定されるが、実見の機会を得ないので、後考を待ちたい。

この目録に記載された、1822年の上演時にフィッセルが検認した芝居出し物のオランダ語明細書は、所在不明であるが、フィッセルが出島商館員の演劇愛好仲間による素人芝居に、主導的な役割を果たしたことを証明している。

## 註

- (1) 安政5年（1858）のオランダ領事官（Nederlandsch Commissaris）ドンケル・クルチウスの参府を加算すれば、167回となる。

- (2) 2017年10月東京都内で発見された宇田川榕菴・辻蘭室筆「ジャワ植物図譜」に関わる在欧資料調査。予定通り実施した。松田清・益満まを「神田佐野文庫所蔵宇田川榕菴・辻蘭室筆『ジャワ植物図譜』について」『神田外語大学日本研究所紀要』第11号(2019年3月)(1)250- (41)210頁参照。
- (3) 源右衛門は阿蘭陀宿御用のほかに、唐人参座役人でもあり、その本宅は鐘撞き堂新道をへだてた長崎屋の向かいにあった。片桐一男(2007)『阿蘭陀宿長崎屋の史料研究』(雄松堂)246-252頁および258頁参照。
- (4) 浅岡修一(2011):「葛飾北斎と浅草庵市人——狂歌絵本『柳の糸』・『東遊』を中心に(上)」北斎館研究所研究紀要3集、68-85頁。浅岡修一(2012):「葛飾北斎と浅草庵市人——狂歌絵本『柳の糸』・『東遊』を中心に(下)」北斎館研究所研究紀要4集、64-83頁。浅岡修一(2013):「葛飾北斎と浅草庵市人(三)——狂歌絵本『画本東都遊』・『東都名所一覧』を中心に(上)」北斎館研究所研究紀要5集、62-87頁。浅岡修一(2014):「葛飾北斎と浅草庵市人(四)——狂歌絵本『画本東都遊』・『東都名所一覧』を中心に(下)」北斎館研究所研究紀要6集、58-86頁。参照。
- (5) 早稲田大学図書館蔵本(チ05\_03828)。早稲田大学図書館古典籍データベース [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/chi05/chi05\\_03828/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/chi05/chi05_03828/index.html) 参照。
- (6) 岩瀬文庫蔵本(68-105)による。この初版本(255×179mm)は「東遊 雪(月・花)」の書き題簽をもつ。浅岡修一(2011)、74頁および同(2013)、65頁は北斎館蔵本の同様の奥付を記載。
- (7) 『狂歌東遊』(東京藝術大学附属図書館、貴-15-37)。新日本古典総合データベースのデジタル画像による。
- (8) 『東遊』(高知城歴史博物館山内文庫、99-525-1)。新日本古典総合データベースのデジタル画像による。浅岡修一(2011)、74頁および同(2013)、64頁は北斎館蔵本の同様の序文を記載。
- (9) 鈴木淳「稲葉華溪筆譜」『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』37号、1-32頁、2011参照。
- (10) 浅岡修一(2013)、64-65頁は国会図書館蔵の色摺改題本も北斎館蔵の墨摺改題本も同様と記載。
- (11) 浅岡修一(2013)、63-66頁は同じ序末を有する北斎館蔵改題色摺本を報告し、「北斎の作品のみを載せた画集の発刊が『東遊』が世に出てからそんなに遅くない時期に

計画されたのではないだろうか。北斎館の刊行年是不詳だが、序に「寛政十二のとしむつき」と記されていることは、そのことを物語っているのではないかと思われる」と推測する。林忠正旧蔵本を手にとった筆者も同感である。

(12) 浅岡修一 (2013)、64-65頁参照。

(13) 『狂哥東遊』東京藝術大学蔵(藝費重書 DIG-TKGL-153) <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100275544/viewer/37>

(14) 『ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展』(国立民族学博物館・ドイツ-日本研究所、1990) 58頁掲載の写真「52將軍綱吉の御前で謁見する図」および同書150頁の解説による。

(15) 国立国会図書館(特 1-1921)。国立国会図書館デジタルコレクションより。以下、『紅毛雑話』巻五または「紅毛服飾之図」の画像は同様。

(16) 鈴木淳(2019)「北斎『東遊』に描かれた江戸の名所 第十六回【長崎屋】」日本古書通信、第1079号、2019年6月号、25頁は「向かって右の人物は円状の食物を手にするが、パンの類かと思われる」と推定する。

(17) 国立国会図書館(特 1-1921)。

(18) 鈴木淳(2019)は「三人の中央の人物は、二重まぶたではなく、また帽子も他のオランダ人とはことになっているところから推して、あるいはオランダ通詞だろうか。」と推定する。

(19) フィッセル『日本風俗備考2』(平凡社東洋文庫) 231頁。オランダ語は引用者が原書から挿入した。

(20) 板沢武雄(1986)『日蘭交渉史の研究』(吉川弘文館)所収「日蘭文化交渉における人的要素」による。

(21) 板沢武雄(1986)、117頁参照。

(22) 大島蘭三郎「蘭館医ド・ハウトの死について」(日本医史学雑誌、12巻2号)に引用された阿知波五郎の調査報告による。デ・ハウトの遺品は1768年6月26日に島で作成された財産目録に従い、同年9月19日に売り立てられ、そのうちヴォイト『医薬宝函』(アムステルダム、1741)は吉雄幸左衛門が入手し、現在、松浦史料博物館に松浦静山旧蔵書として伝わっている。松田(1998)『洋学の書誌的研究』(臨川書店)、611-622頁参照。

(23) 国立国会図書館(特 1-1921)。

(24) 大槻玄沢筆『西賓対語』(静嘉堂文庫蔵)の影印版(昭和53年3月、日蘭学会発

- 行)がある。片桐一男(2007)325-329頁にまとめられた毎回の対談参加者リストは便利である。
- (25) 出島で行われたヘンミー蔵書の競売と蔵書内容については、松田清(1998)『洋学の書誌的研究』(臨川書店)、353-369頁参照。
- (26) 松田清(1998)、104頁参照。
- (27) 京都大学附属図書館蔵雑誌『文明協会ニュース・日本と世界』による。
- (28) ドゥーフ『日本回想録』(永積洋子訳、雄松堂書店、2003)、112頁。人名の原綴は引用者が挿入した。
- (29) 京都大学附属図書館蔵辻蘭室文書、フレデリック・ヒュルペン宛辻蘭室蘭文書簡[VII/ (D) / (3)]。辻蘭室の伊勢屋七兵衛宛蘭文書簡の和訳は、益満まを「草創期の京都蘭学——《辻蘭室文書の書誌的考察》」『日蘭関係史をよみとく 上巻 つなぐ人々』(松方冬子編、臨川書店、2015)、239-241頁参照。
- (30) 桂川甫賢筆丁丑戊寅『寓目録』所載。今泉源吉『蘭学の家 桂川家の人々〔続篇〕』(篠崎書林、1968)132~133頁に翻刻掲載分による。
- (31) ドゥーフ、前掲書、100頁。ドゥーフの言うとおり「小さな浴室」(badkamertje)が長崎屋の2階にあったかどうか、未詳である。
- (32) 『長崎オランダ商館日記 九』(雄松堂書店、1998)、117頁。
- (33) フィッセル『日本風俗備考1』(庄司三男・沼田次郎訳注、平凡社、東洋文庫、1978)、226頁。引用に当たって下線部は「一般の広間」を「共通の広間」に、「共同で一部屋」を「空き部屋一室」に改めた。他は引用書のままである。原書 *Bijdragen tot de kennis van het Japansche rijk*. Amsterdam, J. Müller & Comp., 1833. の原語を必要な箇所に挿入した。
- (34) 以下、複合姓ファン・オーフルメール・フィッセルを便宜上、フィッセルと略称する。
- (35) 以下、複合姓コック・ブロムホフを便宜上、父方の姓を採ってブロムホフと略称する。
- (36) 松田清(1998)、第3章「『ドゥーフ・ハルマ』成立史の解明」参照。
- (37) 松井洋子／マティ・フォラー(2016)責任編集『ライデン国立民族学博物館蔵ブロムホフ蒐集目録』(臨川書店)所収松井洋子(2016)「ヤン・コック＝ブロムホフの日本滞在」はブロムホフの日本滞在期における貿易、外交、日本人との交流を最新の成果に基づき総合的に解説している。

- (38) 松井洋子／マティ・フォラー (2016) 参照。
- (39) 早稲田大学図書館所蔵 (り05 15655)。外題「文化十四年渡来阿蘭陀カピタンヤン  
コックフロンホフ一行写之画」。http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ri05/  
ri05\_15655/index.html による。
- (40) フィッセルの伝記と収集日本コレクションについては、フィッセル『日本風俗備  
考 1』巻末の庄司三男「解説」が詳しい。
- (41) 以下の上演記録の摘記は、『長崎オランダ商館日記 八』(雄松堂書店、1997) お  
よび『長崎オランダ商館日記 九』(雄松堂書店、1998) 中の関係箇所の日蘭交渉史  
研究会による正確な翻訳と両巻の序説・訳注に負う。
- (42) このオランダ語喜劇はオランダの劇作家レインスラーヘル訳『強制された兵士』  
De Soldaat door Dwang, Kluchtig Blyspel; verrykt met Zang. Gevolgd naar het Fran-  
sche, door P.F. Lynslager. Te Amsteldam, by Jan Helders, in de Nes. 1782. Met Privi-  
legie. を翻案改題したものと推定される。改題の副題「二人の兵士」は主人公の民兵  
隊長ドルフィレ (Dorville, kapitein der soldaaten) とデ・タック曹長 (De Tak, ser-  
geant) を指すのだろう。レインスラーヘル訳のフランス語原典は、Louis Anseume,  
*Le Milicien, comédie en un acte, mêlée d'ariettes; La Musique de M. Duny. Représentée pour la première fois à Versailles devant Leurs Majestés, le 29 Décembre 1762, & à Paris sur le Théâtre de la Comédie Italienne le 1 Janvier 1763.* Paris, Duchesne, 1763.
- (43) このオランダ語喜劇はフランス語の原典 Etienne François de Lantier, *L'Impatient, comédie en un acte et en vers libres.* La Haye, H. Constapel, 1780. の蘭訳 De Ongedul-  
dige, blyspel; gevolgd naaar het Fransch, van Lantier, door P.G. Witsen Geysbeek.  
Amsterdam, P.J. Uylenbroek. 1795. に基づくものであった。
- (44) 観自在菩薩楼 (宇田川榕庵) 自筆の写本「和蘭戯芸式人獵師乳汁売娘」および蘭  
文原書 De Twee Jaegers En Het Melkmeisje, Kluchtspel; Met Zang. Gevolgd Naar  
Het Fransche, Door P. F. Lynslager. Te Amsteldam, by J. Helders en A. Mars, in de  
Nes. 1783. Met Privilegie. の榕庵筆写本が早稲田大学図書館洋学文庫 (文庫08\_b0049)  
に伝わる。P.F.Lynslager 蘭訳の原典は Louis Anseume, *Les Deux Chasseurs et la Laitière; comédie en un acte, mêlée d'ariette. Représentée pour la première fois sur le Théâtre des Comédiens Italiens Ordinaires du Roi, le 21 Juillet 1763. La Musique est de M. Duni.* Paris, Chez Duchesne, 1763.

- (45) 『海表叢書』巻2所収「和蘭演戯記」の「役者替名の次第」および宇田川榕菴筆『忒人獵師乳汁売娘』の「役者替名の次第」による。この配役リストでフィッセルは「新渡筆者ヒッスル」と表記されている。関連の写本類については沼田次郎「出島の阿蘭陀俄芝居」(『日本歴史』452号、1986)及び同「再び『出島の阿蘭陀俄芝居』について」(『日本歴史』542号、1993)参照。
- (46) この川原慶賀筆芝居絵は7枚1組からなり、1825年にブロムホフがその複製をオランダ王立珍品陳列館に寄贈したが後に失われ、原本はブロムホフが最期まで愛蔵していたが、1907年ブロムホフ個人コレクションの競売に掛けられ、現在はアムステルダム市公文書館とアムステルダム大学図書館に別れて分蔵されているという。松井洋子／マティ・フォラー(2016)所収Matthi Forrer(2016)69頁の注42および79頁による。黒船館蔵川原慶賀筆『蘭館紅毛芝居絵巻物』(池長孟旧蔵本)については、『長崎オランダ商館日記 九』口絵写真および同書「あとがき」348-351頁参照。
- (47) ONSTAGE. Online Datasystem of Theatre in Amsterdam from the Golden Age to Today. <http://www.vondel.humanities.uva.nl/onstage/> 参照。
- (48) ドゥーフ、前掲書、112頁。
- (49) 江戸幕府旧蔵蘭書(国立国会図書館蔵、269~273)のタッケイ『航海商用地理書』蘭訳(James Hingston Tuckey, *Aardrijkskunde voor zeevaart en koophandel. Naar het Engelsch van James Hingston Tuckeys Maritime Geography and Statistics*. Rotterdam, J. Immerzeel, Junior, 1819. 5 vols.)に「Tot gedachtenis van Dr. Med. Ph. Fr. von Siebold aan den WelEdelgeschrenge Heere Globius Keiserlyk Astronom te Jedo in Mei 1826」(江戸の天文方グロビウス殿へ医学博士 Ph. Fr. フォン・シーボルトの記念に)とのシーボルト自筆の献辞がある。上原久『高橋景保の研究』(講談社、1977)807頁の掲載写真による。
- (50) 出島医師 C.P. ツェンベリーは長崎屋滞在中(1776年5月1日~26日)に訪ねてきた桂川甫周について「医師二人は、毎日私を訪ねてきたのみならず、夜遅くまで居ることがよくあった。いくつかの学問について私から教わり、学ぶためであり、物理学、経済学、そして特に植物学、外科学および内科学を深く極めようとしていた。一人は桂川甫周で將軍の侍医であり、まだ若く、親切で、頭の回転が早く、そしてはつらつとしていた。桂川は衣服に將軍の紋章をつけており、友人の中川淳庵と連れ立ってきた」と述べている。ツェンベリー『江戸参府随行記』(高橋文訳、平凡社、東洋文庫、1994)167頁。

- (51) ドゥーフ、前掲書、113頁。ドゥーフは『回想録』執筆時に、自分の帰国後も大勢の日本人が蘭名を与えられたことをブロンホフあるいはフィッセルから聞かされたようだ。
- (52) 松田清（2007）「志筑忠雄における西洋文法カテゴリーの受容」『蘭学のフロンティア——志筑忠雄の世界』（志筑忠雄没後200年記念国際シンポジウム実行委員会、2007）65-70頁、および松田清（2012）「杏雨書屋所蔵蘭文写本日録稿Ⅰ」（『杏雨』第15号）31（343）- 48（326）頁の「蘭学梯航」項目、参照。
- (53) 今泉源吉（1965）『蘭学の家 桂川家の人々』（篠崎書林）口絵写真「桂川印譜（その一）」、および今泉源吉（1968）『蘭学の家 桂川家の人々〔続篇〕』（篠崎書林）口絵写真「桂川印譜（その二）」。
- (54) 今泉源吉（1968）124-125頁参照。
- (55) 『長崎オランダ商館日記 七』79-80頁。三人および神谷源内、奥平昌高のオランダ語名刺の実物については、今泉源吉（1986）124-127頁参照。
- (56) 今泉源吉（1986）563頁。
- (57) 今泉源吉（1986）口絵写真。この箱書きを含むブロンホフ文書は1907年のブロンホフ・コレクション競売の際に、国立公文書館が購入したものである。
- (58) 後述（40頁）のセリュリエル（1882）「付説」（Naschrift）に掲載された。岩生成一（1959）「日本最初の西洋学会会員——桂川甫賢伝補遺」（『日本歴史』136号、1959）20-22頁にこの書簡の翻訳を掲載するが、典拠をホフマンの著作としているのは誤解を招く。
- (59) Bochumer Sieboldiana Nr. 1.294.000 筆者は2009年8月12日にボフム大学中央図書館において調査した。
- (60) 岩生成一（1959）「日本最初の西洋学会会員——桂川甫賢伝補遺」（『日本歴史』136号、1959）19-20頁。
- (61) 今泉源吉（1968）279-189頁（第三款小関三英の寄食）参照。
- (62) 桂川甫賢模写、1軸、杏雨書屋蔵〔資料06717〕。「麝 皮休封獣譜所載 翠藍桂国寧模（印）」との落款あり。「皮休封」はBuffon（ビュフォン）の音訳。「獣譜」はフランスの博物学者ビュフォン（G.L.L. Buffon, 1707-1788）の『博物誌』のオランダ語版を指す。「麝」図は、その第17巻 Buffon, *De algemeene en byzondere natuurlyk historie*. 17de deel. Amsterdam, J.H. Schneider en Zoon, 1785. 所収の第XXII図、Le Musc（麝香鹿）を拡大模写したもの。



- (63) 神田外語大学附属図書館蔵『蘭語訳撰』第2巻(32828)は、「大江氏」「大江範聖」印があり、大江家旧蔵本である。欠本の第1巻は所在不明。松田清編(2018)『神田外語大学附属図書館神田佐野文庫所蔵 若林正治コレクション蘭学資料目録』15頁D18参照。また、同館蔵『蘭語訳撰』第2巻(16103)は数学者内田五観旧蔵書。内田五観旧蔵第1巻は早稲田大学洋学文庫蔵(文庫08\_a0210)である。松田清編(2018)15頁D19参照。
- (64) 早稲田大学洋学文庫蔵『蘭語訳撰』第1巻(内田五観旧蔵本)による。注63参照。
- (65) その伝記はミヒエル・ヴォルフガング(2006a)「中津藩医大江春塘について」『中津歴史民俗資料館医家史料館叢書VI』58-77頁によって解明された。
- (66) 神田外語大学附属図書館蔵『バスタールト辞書』(16102)は平戸藩医嵐山甫庵(春生)の筆写本。松田清編(2018)17頁D31参照。
- (67) 香川大学附属図書館神原文庫蔵『バスタールト辞書』[849.3]、内田五観旧蔵本による。
- (68) 『バスタールト辞書』の原典がメイエル『語彙宝函』第6版(1688)であること、果樹の比喩は原書標題紙のプリンターズマークらしいことは展示目録『神原文庫洋学資料展「啓蒙の源流」』(香川大学附属図書館、1995年11月)の『バスタールト辞書』解説において、初めて指摘した。同目録は現在では稀少のため、その解説の後半を以下に再録する。

スピノザの友人メイエルが編纂した原書は『外来語』Bastaardt-woorden『術語』Konst-woorden『古語』Verouderde woordenの三部仕立てになっており、『外来語』篇はフランス語からの借用語に、『術語』篇はラテン語の専門用語にそれぞれ対応する複数のオランダ語を訳語として掲げている。十九世紀初頭に出島で作成された通詞の単語帳には「discipel, decipel, 弟子、諸事ヲ学フ童、手習子、バスタールト」などとあり、「バスタールト」が外来語の意味で使用されていたことが分かる。ちなみに、この『バスタールト辞書』では「Discipel 弟子 習フ人」となっている。吉宗の時代に、通詞西善三郎がオランダ人から「コンストウヤルド」という辞書をかりて三通り写したので、オランダ人がその努力に感服して原書を与えた、という逸話が『蘭学事始』にみえるが、この「コンストウヤルド」はメイエルの『語彙宝函』第2篇である可能性が高い。

標題紙には、二人の天使が開いた一冊の書物を両側から抱き、空中に浮遊している姿が画かれている。これは、底本として使用された原書メイエル『語彙宝函』第6版

の口絵からとられたものであろう。「観齋図書」の蔵書印は和算出身の数学者で太陽暦への改暦（明治五年）に貢献した内田五観のもの。五観は家塾を瑪得瑪弟加[マテマチカ]塾あるいは証證館と名づけた。

- (69) 斎藤阿具『ゾーフと日本』（広文館、1922）226頁。
- (70) ヴォルフガング・ミヒェル（2006b）「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」『中津市歴史民俗資料館分館 村上医家史料館資料叢書』V）26頁参照。
- (71) R. セリュリエル（1882）「付説」（Naschrift）、114頁。後述（40頁）参照。
- (72) 中山作三郎は幕命によって文化13年（1816）8月からヘンドリック・ドゥーフ編纂の蘭和辞典初稿の増補改訂事業を命ぜられた阿蘭陀通詞11名の一人で、当時、得三郎を名乗り、小通詞であった。小通詞並の吉雄権之助および同西儀十郎とともに、この事業の主任格を務め、翌文化14年10月、ドゥーフ帰国の直前まで、ドゥーフと共に編纂に没頭し、第2稿をほぼ完成させた。一方、茂土伎次郎（当時は土岐次郎と表記）はこの11名には入っていないが、シーボルト『日本文庫案内』は、ドゥーフ帰国後に校訂作業を行った通詞として、吉雄権之助、中山作三郎、吉雄忠次郎、茂土岐次郎、植林鉄之助、稲部市五郎の6名を挙げている。古賀十二郎（1966）『長崎洋学史 上巻』（長崎学会編、長崎文献社）73-86頁、松田清（1998）78-83頁、参照。
- (73) 古賀十二郎（1966）125頁参照。
- (74) 『長崎オランダ商館日記 九』248-249頁。
- (75) 松田清（1998）78-79頁参照。
- (76) <http://www.vondel.humanities.uva.nl/onstage/plays/1718>参照。ドイツ語原作は A. von Kotzebue, *Die Verläumer, schauspiel*. 蘭訳は De Lasteraar, Tooneelspel. Naar het Hoogduitsch van A. von Kotzebue. Amsterdam, De wed. J. Döll, 1796。
- (77) 早稲田大学洋学文庫蔵「蘭文書翰」（重要文化財）のひとつ（文庫08\_a0402）。  
[http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08\\_a0402/bunko08\\_a0402\\_0001/bunko08\\_a0402\\_0001.pdf](http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/bunko08_a0402/bunko08_a0402_0001/bunko08_a0402_0001.pdf) による。難読箇所について、クレインス・フレデリック（Frederik Cryns）、シンシア・フィアレ（Cynthia Vialle）両氏からご教示いただいた。厚く御礼致します。
- (78) 『長崎オランダ商館日記 十』16頁。
- (79) 板沢武雄（1986）75-78頁。初出は「蘭学の発達」（1933年12月、岩波講座日本歴史）。
- (80) ヴォルフガング・ミヒェル（2006b）26頁に「『ホフマン博士の著書』は確認でき

なかった」とある。

(81) この「付説」は、甫賢の祖父甫周国瑞を『和蘭字彙』の刊行者桂川甫周国興と混同したり、宇田川玄真を宇田川玄直と誤読したりするなどの欠点があるにせよ、オランダ人学者が著したおそらく最初の日本蘭学史として評価すべきであろう。

(82) ミヒェル・ヴォルフガング (2006b) 61頁および64頁。

(83) 本図は卷子仕立ての紙本着彩。縦318mm、横468mm、四周は幅2mmの金紙で縁取られている。長崎版画「阿蘭陀人宴会図」(Mody collection, Plate 60, 297×410mm)の原図と思われる。長崎版画に見られる「Hollander」の題字と左右の蘭文(判読不能)は本図に欠けている。右上に「阿蘭陀人宴会図」、右下に「図説 米食ニアラスシテ麦ニて造リタル焼物ニ副食物ハ鳥獸ノ肉ナリ食後ニ果物ヲ食フ酒ハヲモニ赤キ色ノ物ヲ呑ム其食方モ大ニ我国トハ大ニ変リ一品ツ、持ち来リテ飲食ヲナスト云フ」(下線部抹消)との墨書、また左下に「天明二年秋於長崎写 仙台 林子平并記ス」との署名がある。

本図は大正10年(1921)年10月、宮城県図書館で開催された明治五年学制頒布五十年・宮城県図書館創立四十年記念の展示会に出品された。この記念展示は、同年5月に就任した宮城県図書館長池田菊左衛門が全精力を傾けたものだった。『明治五年学制頒布五十年・宮城県図書館創立四十年記念誌』(宮城県図書館、大正11年9月刊)164頁の「仙台藩名家書画出品人調」によれば、当時の所蔵者は「東京 大武丈夫」となっている。大武丈夫は「林子平画(阿蘭陀人宴会ノ図)」とともに、「林子平画(蘭船)」も出品している。大武は林子平関係の収集家であり、昭和2年(1927)の福岡市先哲遺物展覧会に、子平が塩竈神社祠官藤塚知明に贈った「韻籤」(漢詩競作用の韻字木片、現在神戸市立博物館所蔵)、子平遺愛のオランダ製ワイングラス(オランダ東インド会社万歳の蘭文銘あり)、海国兵談見積書を出陳している。

「阿蘭陀人宴会図」はその後、阿蘭陀船図とともに駐日オランダ公使で陸軍少将のJ.C. パブスト(J.C.Pabst, 1873-1942)の手に渡った。パブストは1923年(大正12)5月1日に公使を拝命して来日。親日家として、日本文化とりわけ日蘭関係史に尋常ならぬ関心を寄せ、関係資料の収集研究につとめた。また、優秀なオランダ人日本学者フェーンストラ・コイベル(J. Feenstra Kuiper)を書記官に抱え、平戸、掛川、角館など各地で日蘭交流史蹟の顕彰活動を展開した。すなわち、掛川では、天然寺に葬られた商館長ヘンミイの墓碑修繕(大正14年6月)に協力。平戸松浦家の当主で日蘭協会を設立した伯爵松浦厚と交流を深め、大正14年10月平戸に建てられた「日蘭親交

記念碑」の除幕式に出席した。秋田角館の小田野直武墓碑（昭和11年 5 月建立）には蘭文の碑文を寄せた。パブストは太平洋戦争の勃発を悲しみつつ、滞日19年目の昭和17年（1942）年 1 月24日に東京で没した。その膨大な日本関係コレクションは封印され、公使館に保存された。

戦前からパブストと友好を深めていたイギリス海軍軍人で日欧交渉史の大家ボクサー（C.R.Boxer、1904-2000）は終戦直後、再来日し、パブストの遺言により、そのコレクションの遺贈を受けた。『阿蘭陀人宴会之図』はこうして林子平の阿蘭陀船図や『三国通覧図説』の研究をすすめたボクサーの愛蔵品となり、彼の没後遺族に伝えられた。2002年アムステルダムの古書店 B.M. Israël が本図を入手したことから、筆者は2003年 1 月29日、同店にて原本を調査することができた。松田清「宮城県図書館新収林子平筆『阿蘭陀人宴会図』の来歴」（河北新報、2004年 5 月23日）参照。

(84) 森島中良は子平の依頼で『海国兵談』草稿の校正増補を行った。松田清（1998）53頁参照。

(85) 『めさまし草』（国立国会図書館、特 1 -953）

(86) 標題紙の写真（図30）によれば、この競売の下見は1907年11月 9 日から11日まで 3 日間、アムステルダム、シングル（Singel）145番で、午前10時から午後 4 時まで開催された。

(87) 松井洋子／マティ・フォラー（2016）71-81頁（英訳）および51-53頁（英訳からの重訳）。

(88) 『出島図 ― その景観と変遷』（1987、長崎市）218-219頁、両図の見開きカラー図版参照。また、この売立目録の記載はアムステルダム国立美術館所蔵の伝石崎融思筆「ブロムホフ家族図」（NG-2008-64）にも合致しない。

(89) フランス語原文は以下の通り。綴りの誤りは訂正せず、そのまま翻字する。

10 **PORTRAITS DE LA FAMILLE COCK BLOMHOFF** et leur personnel. Peinture sur soie anonyme. h. 90 l. 165 cM. (non-tendu) .

Monsieur Cock Blomhoff, qui était gouverneur Hollandais à Decima de 1817-23 est représenté en costume de drap rouge et ornements en or, bas blancs et perruque; la bonne hollandaise est en costume empire avec un grande tablier, madame Blomhoff, née Titia Bergsma est assise sur un canapé noir en riche costume de l'époque avec une grande berthe, sa petite fille auprès d'elle, tandis que deux servants javanais sont debout près du canapé. La peinture est très intéressante pour l'époque et est

très habilement faite sur soie mince.

La peinture doit être faite en 1816 pendant le séjour de la famille à Batavia pendant qu'elle attendait un bateau pour la conduire à Decima, parce que Madame Blomhoff et sa bonne n'étaient pas admis au Japon. Madame Blomhoff mourut à La Haye en 1817.

Voir la reproduction.

(90) 『栄光のオランダ絵画と日本』（神戸市立博物館編、朝日新聞社、1993）78-79頁に、アムステルダム市公文書館所蔵分 5 枚とネーデルラント演劇研究所所蔵分 2 枚のカラー写真を掲載。後者は現在、アムステルダム大学図書館蔵。Matthi Forrer（2016）79頁参照。この図録の解説によれば、座名「ARSLONGAVITABREVIS」の横幕のある舞台を描いた口絵図（展示品番号118番）の寸法は24.3cm×36.9cmであり、問題の売立目録12番の寸法と同程度である。

(91) 『長崎オランダ商館日記 九』の口絵に全 7 枚のうち 5 枚の写真がある。

（補註） 本稿54頁に訳出したデ・フリースのブロムホフ旧蔵コレクション売立目録10番「ブロムホフ家族および使用人の肖像図」のフランス語記載文はルネ・ベルフスマ著『ティツィア』（松江万里子訳、シングルカット社、2003）207-208頁に抄訳されているが、英訳からの重訳のためか、フランス語原文にかならずしも忠実ではない。